

川柳雑誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land - limon

The Senryu Zasshi

No. 297



二月號

窓

口

麻生路郎

私たちの川柳界も、ごうや大人になつたようである。と云つたところ、手放しでよろこぶ訳にもいかない。

という訳は、大人は大人でも、十二歳の大人かも知れないからである。或いはそれに近い大人であると云つた方が當つてゐるのではあるまいか。

現在日本の柳界をリードしてゐる人達の大半は年齢的に云つて還暦前後である。齡い六十、頭に霜をいたたいてなお、川柳々と叫び続けている点はいかに悲壯であるが、それ等の指導者のすべてが、果して思想的に、創作的に、飛躍してゐるか否かは疑はし

い。厚生省の調査によると、日本人の壽命が、五十歳から、六十歳に延びたと云ふことであるが、それにしても、現柳界の指導者の大半が、六十歳前後だとすると、壽命の大方が既に使い果たされた人達だと云つていい。従つて、いかにガシ張つたとしても、大した時を稼ぐことは不可能ではないかと思ふ。思ふに茲に到ると今後の柳界のため寒心にたえない。

当に、と思はれるが、しかも柳界は後退しつゝあると思へないからである。と云う訳は、ロボット式指導者の傘下にあつて、次の指導者を予約？されてゐる人達、自分では自覚してゐないかも知れないが、そうした人達がいて、新しい指導的いぶきを催かなくともしてゐると概るからである。

しかしながら、それ等の新指導者？の現状は、自分が新しく日本柳界の指導者として起つと云う信念の不足と、今後の柳界をいかに指導して行くかと思ふ確たる指導原理を持たないで、卒先して踏切台に立つことを欲しないのではないかと思はれる。

それ等の人達が勇躍して踏切台に立たない最大の要因は、多難の道を切り開いて新しい指導者となつたところで、経済的保証がないと云ふことであらうと思はれるが、そのことは特に柳界に限られた問題ではない。

現在の柳界をリードする人達にしても決して経済的保証があつた訳ではない。イヤ現在でも、なお大半は経済的保証がある訳ではない。しかし止むに止まれぬ川柳創作の魅力は、遂に柳界の指導的立場に立たざるを得なくなつたのでもあつた、又或たされたのである。

それだけに彼等の努力が、——それ自体絶大の努力を拂つてゐると思つたとしても、全柳界から見て、思想的に、創作的に微々たる漸進にすぎないことはいなめないのである。靜に回顧する時、或る者は思想的にも創作的にも、一時は熱狂的に革新を称えたこともあるにはあるが、兎葵の革新は單に異を樹てゝ、一時柳界を騒がし、兄弟がきにせめぐの醜態を演じたにすぎなかつた。或る者は作品第一義をとらず、單に党派的、集團的勢力で、僅に虚名を勝ち得てゐるにすぎない。今日、指導者の立場に立つてゐると自負する人達の中にも、この種の人々の隨力的な存在であつたり、又偶像的存在であつたりする人達もいないとは云えない。

二月号目次

題字……………麻生路郎
表……………石田兵太郎

續川柳講座(27)……………麻生路郎(10)

豪勇物語……………丸山弓削平(13)

竜談……………石原竜刀(14)

對談……………大西野介(15)

伸びれば縮む……………吉田水車(16)

川柳漫釈……………小畑自由朗(17)

紫式部……………富士野鞍馬(18)

窓……………麻生路郎(19)

山陽新聞……………藤本潤年(20)

読者川柳大会記……………藤本潤年(21)

不朽洞喫煙室……………鮎美・忠美・不死鳥(22)

壽像贈呈者御芳名(3)……………(23)

★……………(24)

不朽洞句帖……………麻生路郎(25)

近作柳……………麻生路郎選(26)

川柳……………麻生路郎選(27)

同舟近詠……………諸家(28)

一「女將」……………古川魔花麗選(29)

集「仲人」……………夷一笑選(30)

集「金」……………川村好郎選(31)

各地柳壇……………(32)

不朽洞會から……………(33)

動靜……………(34)

編輯局にて……………(35)



對談

大西野介

麻生梨里

對談スケッチ 種瓜平

浅春の一夜、
川柳評論家
大西野介氏と
新鋭女流作家
麻生梨里さん
に對談をして
もらった。話
題は話者の自
由にまかせた
が、その一問
一答のうちに
は第三者の問
いたいことや
答えたいこと
が含まれてい
るように思は
れて興味が深
い。

(編輯局)

野介 向い合せにならないと
對談の氣持が生まれませんから、
まあ寛いで坐つて下さい。

梨里 なるべく私喋らんで
いいようにお願いします。

野介 すると私に喋らすん
ですな。私何も用意してませ
んが、あんた何か。

梨里 詩的な川柳をどうお
考えです？

野介 最初から心臓の中心
え飛込んだような問題が出ま
したね。

問題になるのは詩的という
言葉で、僕は詩という言葉と
詩的という言葉とは別な物と
考えています。例えば非常に
ロマンチックな美しい夢を
持つているものを一般に詩的
と云われていますが、詩と云
うものが成立する場所はそこ
にあるのではなく、もつと現実
的なものに足場を持つていて
見ますと、この場合私の句を
出して恐れ入りますが、

芝翫香出て襟足へ絹の雨
とか、

美しく死んで渚の緋のしご
き

すが、今の所ロマンチックな
ものと現実を掘り下げたもの
とがゴタゴタに詩として考え
られております。川柳はどこ
までも人間の在り方の現実に
對する批評であらねばならぬ
と云う意味で、所謂詩川柳を
捨てて、本当の現実を正視し
た川柳の立場をとらなければ
ならないんじゃないかと思ひ
ます。梨里ちゃんも長らく僕
に喋らしましたが、今度は梨
里ちゃんに長く喋らそうと思
うんです。

野介 浮華なもの背後にど
うした現実をしっかりと把握
した処にありましよう。例え
ば、いつかの座談会で問題に
なりました路郎先生の、
椅子の背にもう青春が消え
てゐた

此の句の持つてゐる所の現実
性と、而もその現実の裏に突
抜けた所の発掘された現実以
上の眞実性——そこに本当の
詩があるのです。こういう風
に詩と詩的なものとは充分に
区別さるべき一線があるので

梨里 そうすると、今説明
された詩的な川柳と云うもの
を排撃されるわけですね。私
は詩と言う事には素人なの
で、詩というものをよく廣義
に考えています。つまり凡て
の藝術は詩であると思ひま
す。そして、その詩を画家は
絵に依つて表現し、文学家は
文学によつて表し、音楽家は
音によつて表現して、自分以
外の人に訴えるものであると
考えています。そして野介さ
んが先に提出された句を、詩

芝翫香出て襟足へ絹の雨
とか、

人である野介さん自身が、嘗て狙つてをられた境地だと思ひましたが、本當の詩と云うものが昔からそう言つた現實を把握したものでなく、幾分詩全体の方向がそう云う風に移つて來たのではないでしようか？ 他の藝術はロマンチックなものからリアルなものに移つて來てゐるよう思ふのです。

野介「ところで梨里ちゃん、女なる悲しみおんな酌をす

これなんか立派に現實と取組みながら、その現實の底にあるものをはつきりと書いてゐる。こゝで私の考へてゐる詩という概念を單的に解り易く言へば「非詩の詩」ということになるでしようか。結局川柳が俳句や短歌などから區別されるものは現實の批判であり、しかも尙第一義的な藝術としての存在理由を主張出來るところのもの、現實の底に探り當てた詩の脈脈であらねばならぬと思ひます。これが浮薄な俳句や詠歎的な短歌と峻別されるべき一線であり、川柳が現代詩と共に今日の存在理由を主張出來るところの要因であると思ひます。梨里ちゃんと言われた、一切の藝術の根元が詩があると云ふことは正しい。然しその「詩」ということが問題にな

るのですが、この概念なるものはたえず時代と共に歩んでゐる。恐らく明治三十年代の明星派華やかな時代の詩と言ふ觀念と今日の詩と云う觀念は背中合せになつてゐる。明治三十年代に於ては星や董が生活であり現實であつた。然し今日の現實ははるかに嚴びしい。その嚴びしさの底で発見された寶石は甘くも美しくもない。然しそれでいながら今日の魅力的な魅力を持つてゐる。そうしたものが私の先に云ひました「非詩の詩」と言ひたいのです。

梨里「つまり詩的な川柳でなく、詩としての川柳を支持されるわけだと思ひますが、そして將來の川柳の進むべき方向は從來の穿ちの句よりもそうした方向に行くべきだと思ひますか、

野介「僕の考へてゐることは川柳はあくまでも人間の實存に對する批評である、と。問題は、この批評の角度が問題になるのですが、批評されるものと批評するものとが、同一の立場にあれば一つの眞實追求であり、極端に云へば一つの悲劇が成立いたします。ここに穿ちやおかし

の世界はないのです。然し批評するものが、批評されるものの一段上の立場に立つことによつて、そこに喜劇の成立する場所があるのです。これはいづれも批評の仕方であり、二つ共川柳を成立せしめる素地であります。川柳家が批評家である以上、彼の立場が前の立場に近づく人もある



句の内に詩があると云うわけのものでもありません。作家はたとえ喜劇作家であらうとも、自作の舞台を眺めてゐるモリエールの如き嚴肅でむしろ悲劇的な風貌を示してゐるんじゃないかと思ひます。

梨里「そうですね。

野介「ところで梨里ちゃん、話が一寸理に走り過ぎましたね、そこでぐつと軟くだけで梨里ちゃんから見

た路郎先生を話してくれませんか。

梨里「大抵の人は誰でも私的生活と公的生活との両面を持つてゐますが、父には川柳が繪てですから私が父を語るまでもなく皆さんがよく御存知の通りではないかと思ふのですが。

野介「うまく逃げましたねですが路郎先生はそこをえ出られると大抵氣むすかしい日が多いんですが、おうち殊に梨里ちゃんや一歩ちゃんに對するような場合はどうでしょう。

梨里「よく父が氣むすかし

いというようなことを聞きませんが、それは藝術上の主義主張を仮令如何なる場合にも枉げ得ない父の立場から出たものであると思ひます。すべてに於て家庭内でも外でも同じであると思つていただいてよいと思ひます。

野介「

俺に似よ俺に似るなと子をおもひ

(路郎)

この句の背後にあるのは大きな父親としての愛で——それが日常生活の間に單なる甘くないお父さんとしての念が相當出るんじゃないかと思つて何か美しい氣がします。それでいてお父ちゃんや梨里ちゃんや一歩ちゃんの作句なんか——熱心に読んでいますよ。

梨里「けれども私達の作品に對しては一言の批評もないんですよ……」

私、此の頃一向に句が出來ないのですが、すこし作らないと非常に作りにくくなると同時にひとの句も一つ感銘が薄くなるように思ふのですが野介さんは、そんなことありませんか。

野介「仰せの通りです。私此頃、手形と先附小切手のジャングルの中をさ迷つてゐるすのでなか／＼句が作れません。然しときたま良い句を見すると矢張りこれはいいなと思ひますね。

梨里私は女だから矢張り多少感傷的なかも知れませんが何か知ら説明の出来ない悲しみに満たされるような時があるんですが、それはどう云つたらいいかな、何か宇宙全体その物、それらに包まれている総てが悲いと云うことになるのかも知れません。そう云う説明の出来ないいつきつめた氣持の時に句が生れるのです。それで何も考えない穩やかな時や、心のうき／＼した時には一向に句が出ないんです。野介さんは女の人の句をどう思われますか？

野介五十になつても百になつても女の氣持ちは分りません(笑)いつかの女流作家だけの句評を見たことがありますが確に男性とは違つた感受の仕方があつたらしく、男では中々氣の付かないところを説明されて、やつと分つた句もありました。そんな意味で女性としてのユニツクな句はそれが独特であればある程強い魅力を持ち、逆に普遍性があるんじゃないかと思ひます。

梨里男の人と女の人と好きな句が大分違ふように思ふんです。それは一寸何かで揚げられてゐる佳句とか、名句とか云われる句でもあまり共鳴の出来ないと思ふより、あんまりうまいと思へない句があるんですが、その場合私

だけでなく母も同じ意見の事が多い、あるんです。これはやはり女の見方が違ふのか、或いは男の人の氣持が理解出来にくいのでそうなるのか知れませんが、どちらか云うと道德的でない物には一種の反感が無意識に動くのかも知れませんが、女は矢張り度量が小さいですね。

野介いや、むしろ男性の

識ですけれど。藝術の世界で男性とか女性とか云う風なものを超越した所に本當の藝術の世界があるのではないでしようか。女性であり男性である云うことは藝術以前の世から云えば女性も男性もないのが本當です。然し人に個性というものが認められている以上女性には女性的な感受性

不 朽 洞 句 帖

麻 生 路 郎

眞盆も古りふりてわが枕元

つまり胃が弱いの人やと突き放し

私の処方箋には淋しさと甘さ

お婆さんに限り死にたがり死にたがり

雨風が逢いたいところつものらせる

中性になつて居ることも知らず恋い

米の値も知らずヒューマニズム称え

方が我儘なんでしょう。そう思つたことを他人に押付けて平氣でいられるんですからね、それで藝術の世界に倫理は無いと威張つていられるんですからね。然し相対的に云つて男性は非常に知的であり女性に感情的であると云えるんでしようね、これはむしろ常

があり、男性の感受性とは確に区別されるべき一線があると思ひます。そうかと云つて藝術の世界は、そうした男性の感受性や女性の感受性を超えたところに、むしろ全人間としての感受性の上にあるものと私は見たいのです。これはあたかも色んな個性をは

つきりと見つめながら、その個性を超えたところに藝術の藝術的價値があるのと同じように考えられますが、いかがでしよう……

梨里……その通りなんですが私の云いたいことは、矢張り性別とか環境とか云う風なものも藝術の形成過程に於て重大な役割を持つており、殊に女性的生活が日本に於て男性と相當に距離を持つてゐる場合、女性性は女性としての句が生れるのが本當じやないかと思ふのです。

野介よく分りました。その通りです。

最後に最近の「川柳雜誌」より良いと思つた句を上げて下さい。

梨里「句を拾うと云うことになることも難かしいですね。」

野介「では好きな句は梨里「そうですね……」

花屋の前でフト葬式の匂ひする (香林)

人形のすなほに我に抱かれたり (野介)

つきつめたこの娘のおもひまぶしいよ (同)

こういう素直な句が好きです野介「僕の句があげられたのは何んだか変で、

梨里「作者を前にして変ですけど、これは前から書き抜いてあつた句ですから……それから又別な意味で、

發憤もいいが妻子をみんなすて (不水)

三べんに區切つたあくび母も老け (幽王)

日記へは妻へ失言詫びておた (朱入)

秋風よ心してふけ服は夏 (自由朗)

左り前夫の戀も終るらん (草一郎)

等、良い句だと思ひます。野介さんはどんな句が良いと思ひますか？

野介「新年号の「川柳塔」から、ざつと目を通したところですが良いと思つた句、瘦つぽのうしろ姿にある氣骨 (鮎美)

言へない事を言つて呉れたて別れる氣 (夢裡)

四十の戀は手形を割つて会ひ (栗)

子が無くて夫炬燵で欠伸をし (弓削平)

持つて廻れば番傘の重いこと (美秋)

階段を社長一杯に下りて来る (夏六)

寒い朝髪をやけたる猫が来る (朗笑)

などチエツクさしてもらつて何か云わして貰いたいと思ひましたが、今晚の対談では、話題が以外な方面へ飛んだので、殊に枕置が長くなりまして、次の機会にゆずらしてもらいたいと思ひます。



亡き米田孤舟さんを偲ぶ
若死の米田孤舟は雲のなか
尼ヶ崎 水谷 鮎 美

京都市 村松 夢 裡

ペリオドをうちきれなくてする未練
予定した泊り汽車迄見送られ
病葉の目につく日なり咳はげし

大牟田市 高田 抱 逸

大阪市 中島 生々 庵

アメリカにジャパンボーナス嗤われる
又借りに行けば停電起きてゐず

布 哇 市 岡 曉 舟

呑み続きズボンの筋が忘れられ
本年もよろしくなどと悪びれず
繰り合せ繰り合せ忘年会つづき

奈良縣 上田 翠 光

氣の早い年始替へる間を待たせ
倅せな夫婦元旦旅にあり

ホノルル 白砂 旋 風

兵庫縣 戸倉 普 天

年頃は抱き締められる夢ばかり
大阪市 市場 沒 食子

税務署の手紙いや／＼あけて見る
新米も少し持たせて帰らせる

某氏重役昇進

デパートへ儲けさすべくこの人出
代書屋が書けば文句もなく通り

表具屋も畳屋も暇金づまり

名古屋 市 吉 田 水 車

社会党夫婦喧嘩のように割れ
破談(二句)

大將の額はいつしか影を消し
虚無僧のサーピスに吹くトンコ節

大阪市 須崎 豆 秋

愛情の問題父母に術もなし
交際は夏から秋え冷めたのか
退職金みな肺に注ぎ込んだ話

ホノルル 内藤 草一 郎

佳い年をこれよとバチンコ屋で袂れ
墓石の輻重一等兵悲し

大阪市 竹内 潮 花

あたしだつて勤め出ると泣きじやくり
つれなかりウンと云わせて置きながら
美も又惨三階建の燃ゆる色

ヒスられた頃がおいらの花だつた

一号は喰へず二号は喰べたはる
おつさんと呼ばれ都会で芋を焼き
得恋の日から女は死にたがり
姜腹に生まれて三味の音が好き

大阪市 北川 春 巢

相談に来て結論を云う若さ
秋死んだ幸は菊花に飾られる
急逝をしたと税務署へも知らし

招待の歌舞伎へ薬持つて行き
豪傑笑いで寝ている子を起し
お産の日近く押売り買うてやり

女教師の油断あくびをしてしまい

奈良縣 尾崎 方 正

安サラー岩に生えてる松に似て
まだ生きた積りか親父株を買ひ
バーテンダー横顔見せて寒うゐる

生活に疲れ細君猿に似る
曲線美隠す寒さをもの憂がり

最生船にのる
下関市 櫻川 不 水

死灰またちよろ／＼燃えて船に乗り
シヤトルにて

住宅の展覧会へ行つた様

姫路市 夷 一 笑

氣のながいのに我ながら驚きぬ
計画も樹てす元日寝てしまひ

三ケ日飲みに来たなと思へども

岡山縣 大森 風 來子

機関銃のように恐つてもう忘れ
子の玩具あくたとなつて大晦日
愛妻家などと体よくあしらわれ

鳥取市 中島 鉄 洲

出雲句会にて
師と語れば不老薬にも及びたり
老いぬるか僧神主が近づきて

手切金いくら出すかとおどかされ
大阪市 水谷 竹 莊



別れてもいゝよと一人旅に出る
色街のうそにもなれていゝ旦那
何者も憎まぬ知性ざりもどし

下関市 弘津柳慶

禁煙をしたのは昨日だけのこと
冗談も交へふ料理運ばれる

堺市 吉田圭井堂

呼捨ての客を給仕は持て余し
米壽なほ曾孫に針を通さず
先代の墓も建てたり孫もだき

鳥取市 杉谷湖山

ふくみもつ言葉無性にうれしがり
無口まだ黙つて盃受けて居る

下関市 國弘半休門

除夜の鐘ストモ中止の響する

八代市 佐野ト占

店番は臨時なれ共世辞も云ひ
大晦日聴き手もないラヂオ切る

大阪市 渡辺孫拙

わきたての風呂先陣を争はず
セコハンの安物買いに人の波

大阪市 富岡淡舟

詩吟朗々師走の風に乘つて来る
赤旗の先頭に立つ乱れ髪

奈良縣 飯降白香

ねんねこで背負て哀れな父の髭
生きにくさ私もストに賛成だ

奈良縣 西辻竹青

恩愛に犬程しつばはふらねども

山口縣 長野井蛙

お嘆舌が急にやんだは寄附の額
廻り椅子不平は背で軽き

大阪市 上田春柳

十二月おやちこせ／＼言ひたがり
パンクしたかてなほしてもらふ金もなし
はがき一枚で感情がもつれあひ

布施市 森下愛論

まないたの音我が家が楽しけれ

大阪市 松江梅里

額見世吉右エ門
帯の端踏んで恨みの籠釣瓶
しん猫でちよね／＼やつてゐやはりま

岡山縣 丸山弓削平

下宿まで傘に入つて来そうな娘
性典を讀んで良人をはがゆがり
家計簿をきつちりつけて哀れなり

失恋をした婦郷とは親知らず
秋刀魚サンマ俺は佗しいひざりもの

岡山縣 直原七面山

接吻一号また夢に見て
パン／＼に宵の吹雪の傷々し

闇師から心易うにされて淋しく
借金をしてまでオートバイを買ひ

岡山縣 黒田笑泉

貧しさへ暇ある暮しうらやまれ
催促もようせす時効にしてしまひ

宇部市 上林粗影

口答する妻になり子が産れ
反抗の唇とみに艶かし

いと淋しけれお医者公休日
女三人化粧品に結論をみず

秋深し老夫婦こどりとせす
哀れ古道具屋で見た甲冑よ

西宮市 石岡正司

あの島がソ聯と聞いた旅役者
内湯あり先づ寄せ鍋を注文し

夢崩れくづれて場末の行狀記

婦人記者交えてくぐる細のれん
二言目家出するわに母は折れ
樂天家夫婦に貸間したを悔い
臍くりで買える株の名きいてくる

鳥取市 河村日満子

指手術する
指一本へ医者三人で立向い

社党分裂

親分をしてしまつた社会主義
支拂ひへ女は小銭持ちあわせ
鼻唄で好きなお人のもの洗ふ

兵庫縣 田代尋四

競輪で勝てば彼女が逆戻り
青白くしぼんだ恋の彼女逝く
氣があるのか無いのか彼女喰ふばかり

寒さにも飢にも耐えて恋に負け
大学は出たが算盤から習ひ
見学の列がよどんだミス職場

兵庫縣 家沢薺花

義士傳も酒好きばかり名を残し
ある日ふと妻は働きものに見え
妻を見て女でなかつた有難さ

岡山市 藤本満年

來客をもてなすお茶に目が冴える
身振り手振り我説を通したく

熊本縣 西口如川

産み月になれば麗人型でなし
松過ぎる頃は神様ひまになり
元日の元日らしい雪が積み

徳島縣 姫田夕鐘

掛取りを寢床へ通すも年の暮
商賣を聴いてデヤン／＼酌いでくれ

岡山縣 福島鉄兒

じゝむさい妻に写りぬ酔うた眼に



子の前であほらしい真似止めなれ
慰藉料は貰いまつせと荷をまこめ

岡山縣 直原 湖月

愛情はランプの蕊にさも似たり
お妾の愛の技巧に追つ付けず

鼻高に見せる工夫へ娘は疲れ
やんちや言うどこ迄此の子主人似で

夢は先ずボーナス袋から破れ
一時二時お帰りのない風の音

岡山市 藤本 茶々

百姓は休まず新穀感謝祭
芽の落ちて見る大木の淋しけり

岡山縣 高山 朗笑

三日雨土方死ぬより仕方なし
鐘三つそれから稼業怠け出し

岡山縣 服部 十九平

妻の愚痴説者の声となつて載り
敷医者が推理小説などを書き

岡山縣 大森 娛句樂

風上げる口もへの字にゆがめられ
風向きを氣にして居れぬ程に酔ひ

熊本縣 成瀬 月仙

水貰ふだけに女の暇が入り
名も知らぬ面会が来る地位になり

兵庫縣 若林 草右

ボーナスの出た日はみんな拘摸にみえ
空くじが一枚出て来た大晦日

大阪市 足立 春雄

朝風呂の味も知つて深夜業
寄添ふて歩いたらしい雪の道

大牟田 中村 五醉

お隣りに愛妻家が来てからの妻
炬燵から税のかゝらぬ雪景色

親達に内緒オフィスで編むジャケツ
妻子あり我が信條もまげて生き

死出の旅優しいママと子は思ひ
美くしい女夜汽車が好きらしい

試験管立ての穴までも拭く大晦日
止めている煙草思はず探してた

月給も安くて寒い場所に居り
禁酒したとこへ招待続くなり

熊本縣 有働 芳仙

下関市 延永 忠美

岡山市 延永 忠美

下関市 阪田 良坊

大朝小説「めし」

下関市 石川 侃流

就職へ元兵卒が試験官
常連は肩から這入る縄のれん

貧乏は貧乏なりのしめかざり
焼けるねーと屋根で見ている遠い火事

野球上手どうやら首をのがれたり
帰省して背廣は月賦とも云はず

燃え出した焚火へ始業ベルが鳴り
キツスすればきたないように少女拭き

借のある店の歳暮にぎよつとする
砂防工事ハゲ山へ傷つけただけ

収入も桁が違ふて家を築て
子供がないからパチンコに熱を上げ

大阪市 山本 葉光

大学を出ているらしい日傭夫
洋服の函提げている十二月

弱い身を風よあんまりいぢめるな
一流となれば女房の絵も賣れて

後悔はせぬと云ふ妓の目が淋し
番傘を一人でさせというて去に

母ちゃんが断然強い十二月
親心子心お正月がくる

苦勞などいといませんとのぼせとり
審判所もとの夫婦にして帰へし

パチンコで当てる煙草だ遠慮なく
パチンコの上手さ失業何のその

百円札もう小遣の資格なし
堀下げて見たら汚職の水が出た

大阪市 東喜 久堂

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧

大阪府 表天 貧



たつぷり

愛嬌たつぷり
B1 たつぷり



疲労と脚氣に

メタボリン

錠・注・無痛注



龍談

石原青龍刀

陰曆によつて作られた十干十二支(エト)を、陽曆にあてはめて用いることは不合理と思われるが、明治時代曆法さきかえの際に於ける不注意(?)から、非公式にそれが陽曆に対しても延用される今日に及んでいる。非公式というのは國法の上でなく、民間で作られる曆に陰陽曆を混同して毎年の干支が定められてゐるという意味だ。そして今日でも迷信的な運勢占いに丙午(ヒノエウマ)生れの女がどうのこうのといつたり、誰はトラの年生れだからどうだなどとツマラヌことを言つてゐる。ジャーナリズムはそれを無反省に利用して、新年号には判でおしたように、その年のエトに因む文章や絵画をのせたものだ。この世界唯一の日本のジャーナリズムに感化されたばかりは、習性となつてしまつて、今日でもまだそうしたエトに興味をもつてゐるのだから、自分ながらおかしい。

事になる。その竜にちなむ雑事を書こうといふのだ。竜はよく自身を御座にも用いてゐるのでマンザラ無縁でもない。「二十の扉」においては何物に入れるべきだろうか。科学上生物学的に説明することのできないもの、すなはち中國民族が幻想によつて架空に作りあげたもの、人間の思念の中に入り込むもの、人間関係のものとして動物に入れるというなら理由が無くもない。ところで西洋にも竜といふのがあるかどうか、ドラゴンといふのがそれだと説く人があるが、ドラゴンの幻想を画いたのを見ると蛇の化物ではなくて、四ツ足の化物、キリンビールのレッテルのキリンに似たような化物である。何よりも大きな竜が、竜には必ず雲が付きものであるのに、ドラゴンには雲と関係が無い。科学的(といふのもへんな話だが)に竜は爬虫類の化物であるのに、ドラゴンには有蹄類の化物である。もしその両者に似ている点があるとすれば、幻想上の架空の神秘的な動物ということだけではないだろうか。しかもその神通力と應用範圍の廣大無

遍なるにおいてドラゴンに到底竜の足もとにも及ばない。中國の端午の節句を英語でドラゴン・フエスティバルと訳するにいたつては全たくもつて言語道斷のサタである。(ドラゴン・フエスティバルは華南における端午の節句の單なる一行事「竜渡」……我が長崎にベローロ競漕として傳つてゐる……から思ひついた英訳であるにすぎない) 蛇足(ダクソク)という言葉があるが、竜に足があるのは何のためだろう。あれだけの神通力があるなら足なんか必要ではないかと思ふのだが、足が無いと蛇とまちがえられて威厳にかゝるといふわけかも知れない。それにしてもあのヒゲは愉快である。あれだけの莊嚴華麗な竜の顔にヒゲだけはまるでナマズのヒゲのように貧弱に描いてある。対照の妙といふべきであらうか。

東洋の神祕にゆらぐ竜のひげ (青竜刀)

竜の爪には五つのと三つのと二種ある。爪といつても單なるツメではなく、雞の足の指みたいなものだが、五爪は帝王關係の竜だけに限られ(描かれ)民間關係の場合は三つ爪に描くといふ説がある。(何時代に誰が定めたのかわからない)そこで先日東京の川柳会で竜の題が出たので、ぼくは竜を主張してゐる三つ爪といふのを出して見た。おそらく選者先生には意味がわかりにならないが、いあるま

い。こういう当節理解範圍の狭い句を作るのは惡趣味かも知れない。

竜の色分けについて、調べるヒマが無いまゝにばくは中國から追放されて帰つて來た。従つて青竜刀の青竜の意味もまだよく分らない。帝王を意味する黃竜とは異つた。いさゝかツムジ曲りの竜だろうといふことは大体想像できる。(竜の話は多いが、長くなるからこのへんで)

不朽洞

市(ホノル、イムス新年号募集の川柳の選評をされた由)川村好郎氏(東京都)は十二月十六日から北海道へ出張、廿六日頃東京へ年末ぎりぐりに帰阪されるとのこと、黒沢尻から「社用族の一人になつて登別」の句信を寄せられた。中島生々庵理事長(大阪市)は十二月廿九日夜、路郎師夫妻を招いて家族の忘年会をされた。小倉へち氏(西宮市)は一月六日社用で東上された。佐野ト占氏(八代市)は一月五日には金剛村公民館主催の新春句会に、六日には熊本中央公

館で田中辰二氏主催の新春句会に出席された。福田山雨松氏(横浜市)は毎日病床にあつてひたすら静養につとめられてゐる由、一日も早く快方に向はれるようお祈りする。大坂形水居氏は大阪市東区糸屋町一丁目へ轉居された。水田草骨氏(岡山縣)は川柳以外に彫刻に興味をもたれ茶が好きなので茶道具などを草骨流に作つていられるとのこと。石曾根氏(松本市)は「現代川柳展覧」(自選川柳年刊句集改題)を二月に刊行される由、A5版四二〇頁・價四〇〇円・千五〇円。松本市大名町しなの川柳社発行。田垣方氏(岡山縣)は山陽新聞第二十三回読者文藝の川柳第一席に入賞(金千円)された。須崎豆秋氏(大阪市)は「今年のお正月は風邪ひきてさつぱりわやです。お酒呑みながらの風邪薬ですから一向にくすりの利き目がなく夢はバチンコをかけ巡りながら元日、二日、三日と四日の今日も引ついて寝ています」とのこと。水本無氏(大阪府)は無盡(むじん)と改号

新會員紹介

一月

木村 水堂氏(大阪市)正
香林氏推薦

耳鼻咽喉科 羊田病院

院長 羊田 哲三郎(一哲)

大阪市南区長堀橋交又点西・電話組場五〇〇〇番



續川柳講座 (27)

麻生路郎

數詞を用いた句に就て

劍珍坊の句に、
串團子はじめ一つはたてに食ひ
と云うのがあります。一読した時にはありのまゝを写生しただけで何んの変哲もないような句であります。ジツと噛みしめて見ると、ユーモラスな味が出て來ます。ではそんな味が何処から出て來るのであらうとセンサクして見るまでもありません。「一つはたてに食ひ」と云う、「一つ」の、適確さが、穿ちとして認められるところにあるのであります。そしてこの「一つ」と云う數詞は抽象數詞であります。單に抽象數詞に限らず、句の構成上、數量數詞や順序數詞、その外、不定數詞や概數詞、敬讓數詞などを活用させるると面白く句が出來ます。その多くは穿ちの役目を適確に果たしているようにあります。半面には數詞に

興味を持ちすぎて數詞を濫用したと思はれない句も多數にあるのであります。そしてそれ等の數詞濫用の句を川柳園から除去したいために、こゝに數詞を含んだ句を問題としてとりあげたのであります。
先づ數詞濫用作の惡例を古句から抜いて参考に資しませう。
十四本手を出し藪敷追つてい
と云う句があります。この十四本は全く判じ物であつて、數詞の活用もこゝまで行つては行き過ぎでありましよう。句意の判らない方のために少しく解説を試みますと、これは竹林の七賢人の両手を合算したソロバン川柳なのであります。七賢人は支那晋の厭世文學者、嵇康、阮籍、阮咸、劉伶、向秀、山濤、王戎の七人のことで、世をのがれて清談を事とし、常に竹林に交遊して居たと云うのであります。これだけのことが判れば「藪敷

追つてい」が判るでしょう。面白いと云えば面白いかも知れないが、十四本は少し飛躍しすぎていると思ひます。斯うした例句は幾らでもあります。

二千九百九十九人は画師承知
と云う句があります。これも二千九百九十九人が判じ物となつて作者が一人で面白がつてゐる句にすぎません。

これは王昭君が十七の時に漢の元帝の後宮に入つたが、後宮には多くの美人がいたので元帝は一々見ることが出來ぬので毛延壽と云う画家に一人々々を描かして、それを見ることにしたのです。そうなる、誰も彼れもがその画家にワイロを贈つて少しでも美しく描いてもらうことを願つたが、王昭君は美貌をたのんで、ワイロをしなかつたので毛延壽は王昭君を醜く描いたのであります。ところが、後に匈奴がやつて來て美人を求めた時、元帝は画で選定して王昭君を匈奴にやることにしたのである。王昭君は夷狄の地にやられるので、帝に暇をいに行つたところが、匈奴えの美人だつたので、帝は今更のようになつた。匈奴えの約東だからどうすることも出来なかつたのです。王昭君は帝を怨んで怨思の歌を作りましたが、後、毒を仰いで死んだ

のです。王昭君の墓は蒙疆の歸化城の郊外にあります。昭和十三年に私はこの墓を訪ねたことがあります。何れは支那式誇張でありましようが、後宮の美人が三千人と稱されてゐたので、こんなソロバン川柳が詠まれたのであります。句意が判つて見ても面白い句だとは思ひません。

次に赤穂義士を詠んだ斯うした句を例示して見ましよう。孝よりも忠義は二十多し
二十四の孝より四十七の忠
唐後七十一字忠と孝
明店が四十七軒暮に出來
五十膳ほどと畫來て金を置き
大手が二十四からめ手が二十三
親子して四十五人の下知をする
一字づゝ仮名の働く十四日
首一つ九十四眼へにらめつけ
九十二の足跡尋へ雪の庭
墓あり穠を九十四本買ひ
幾らでもありますが、すべてが、四十七と云う數字のソロバン川柳であつて作者が一人面白がつてゐるのに過ません。九十二の足跡の句は寺坂を省いた四十六人の二倍九十二と細まかい勘定をしたものです。この句は九十四の足跡にしたのもありますが、何れにしても机上制作、遊戯文字で終始している句であります。惡例について、少し多くとく述べすぎたやうであります。今日でも、こんな句が盛んに横行しているのを見か

けますので、特に留意していただきたいのに外ならんであります。

では數詞を用いた句は、みなくだらぬ句かと云へば、そうではありません。數詞と云うものは、事物の數量又は順序をあらわす語であります。が、宇宙間の事物はすべて數に關係があるのであります。から、川柳の句作上にも重要な役割を持つてゐるのであります。しかし、これが用い方によつては前述のように判じ物的作品となつたり、單なる遊戯的作品となつて世のヒンシユクをかうに過ぎなくなるのであります。

しかし、古句にも、數詞を實に適確に用いた名吟もないことはありません。例へば
ぶちまけて二タ足逃げる炭俵
と云うのがあります。これなどは、二タ足が動かすことの出來ない、この写生句のキメ手となつて居ります。これは一ト足でも、三足でもいいないのであります。炭俵をブチまけたその瞬間、タヂ／＼と二タ足逃げたところに、その人物さえ想像することが出來、いかに數詞を適確に用いてゐるかが判るでしよう。日車の句に
刺身二きれ皿に残したまゝでね
と云うのがありますが、この

「二きれ」は必ずしも二きれでなくともよいと思います。この外に、

これ小判たつたと晩居てくれろ

この部屋に一人寝ますと氣をもませ

四五両で済めばおふくみ受出す氣

死に兼ねる蒲團の下に二三両

などがあります。四五両、二三両の句は概数詞による句であります。

次に現代作家が、数詞で構成した作品十数句を例示し、少しく解説を試みることにいたします。

一本の外はごうでもよいタイプ

(橙 舎)

ふらい人の朝日一本だけもらひ

(豆 秋)

番附を探すに四人ながら立ち

(五 葉)

迷子は泣いて四五間づゝ走り

(緑 天)

三分の二は只ワア／＼とストライキ

(柳 慶)

五〇〇名社交係を募る灯よ

(登 竜)

八十四もしている諸で下痢をする
(春 集)

千四もしますのやと酌をされ
(生々庵)

肥車十両の牛が挽き
(宏 方)

名乗り出た百万両を眺んで寝る
(一球)

時間表五十九分の着があり
(孤 浪)

「二きれ」は必ずしも二きれでなくともよいと思います。この外に、これ小判たつたと晩居てくれろこの部屋に一人寝ますと氣をもませ四五両で済めばおふくみ受出す氣死に兼ねる蒲團の下に二三両などがあります。四五両、二三両の句は概数詞による句であります。次に現代作家が、数詞で構成した作品十数句を例示し、少しく解説を試みることにいたします。

「二きれ」は必ずしも二きれでなくともよいと思います。この外に、これ小判たつたと晩居てくれろ

この部屋に一人寝ますと氣をもませ

四五両で済めばおふくみ受出す氣

死に兼ねる蒲團の下に二三両

などがあります。四五両、二三両の句は概数詞による句であります。

次に現代作家が、数詞で構成した作品十数句を例示し、少しく解説を試みることにいたします。

「ふらい人の朝日」の句も、

「一本だけ」の「一本」が、よく利いていて面白い句であります。

「朝日」は質素な乃木將軍が喫うていたので乃木タバコとも呼ばれ、会社のふらい人なども乃木さんを真似て安價な「朝日」を喫うていたものであります。そんな安物のタバコ一本にピヨコンと頭を下げて、押しいたでいて

いるところに作者はユーモア味を感じたのであります。

「番附を」の句は椅子席以前の劇場の内部を知らぬ人には句意がハッキリしないと思

いますので、簡単に説明をしておきます。現在椅子席にな

っている中央部を平場と云つて居り、四人詰の柵になつて

いました。そして坐つて芝居を見物したものであります。

そこでタツタ一部の番附を探

がすのに、四人が四人共座を

立たねばならなかつたのであ

ります。二人立つても、三人

立つてもよかりそうなのであ

りますが、この場合四人が

「迷子は」の句も写生句であります。そして「四五間づゝ走り」の「四五間」と云う概数詞が、かなり適確な穿ちとなつて、情景を写しとさせています。前掲「二タ足逃げる」の句の「二タ足」と、この句の「四五間」とは同巧異曲であります。

「三分の二」の句は数学的な表現に面白さを感じさせられる句であり、又穿ちでもあります。三分の二は抽象数詞であります。

「五〇〇名」の句は、その

あることも面白いと思いま

す。

「八十両も」の句は、その

ものが諸であるところに面白

さが感じられるのでありま

す。米不足から諸一貫目が八

十両もした終戦当時の物價

を、この句から知ることが出

来ます。

「千両も」の句も物價の暴

騰で一舛千両もするので、ヤ

ヤミに吞まぬよう妻君から、

酒の値を聞かされながら酌を

されているのであります。

「肥車」の句も矢張り物價

の暴騰で、たかが牛一疋だと思

うのに、それが十両もする

る。その十両もする牛で肥

車を挽くと云う、十両四と肥

車との対照に興味を感じたの

であります。

「名乗り出た」の句は、百万両の宝くじを詠んだもの、当るのは常に他人であることが、この句からうなづけるのであります。「読んで寝る」は夕刊で当つた人のことを読んで寝ると云う意で、措字を巧みに省略しています。

「時間表」の句は五十九分と云うキワドイ数字に興味を感じた句、しかも穿ちでもあります。

「二零が零」はソロバン川柳ではありますが、一寸技巧の面白さがあります。これを「空財布二つ机に放つとかれ」と詠んだとすれば、場所ハッキリ判りますが、單に報告にすぎない句となつて味と云うものが無くなつてしま

います。句の表現と云うものはまことに微妙なものであります。

「返盃を投げたは」の句の「二十四五の頃」の句も概数詞によつて、句を巧みに構成して居ります。盃を投げる作

中の人物の若さがハッキリと出ていてうれしい句です。

以上述べたところを、よく味読されたならば数詞による句の死活がうなづけようと思

います。

瓶の銀山

大阪市大東區長柄
西通一丁目四ノ

山銀硝子株式會社

電話堀川四四七番



選郎路

珍客が財布盗られた事に觸れ 岡山市 山本 焦兒
 ボーナスを借金取りが待ちあぐみ 同 同
 律氣さが娘の小説を取り挙げる 同 同
 八方美人みな名案にしてしまい 同 同
 猛犬が雷様へあとすざる 同 同
 酔うた檢事次第に論告調になり 同 同
 作業衣のまんま彼女につきあたり 吳市 余頃 紅兒
 仲人は吃るなどとは言はなんだ 同 同
 見送りへ前掛も居る酒どころ 同 同
 でぼちんの艶も一等寢台車 同 同
 本心をつかめぬまゝに子を宿し 同 同
 個人なら相手にせぬが地位に怖じ 今治市 長野 文庫
 撮影所地上五尺の大スリル 同 同
 投資りも万止むを得ず三女四女 同 同
 書いて來た清書どうやら母の腕 同 同
 値上げなどお構いなしに出張し 同 同
 社長はと問えば息子の事でつか 岡山縣 浜野 奇童
 通学の子等が焚火を占領し 同 同
 今日からは私のものでない乳房 同 同
 家の娘の日記ぼつ／＼月を賞め 同 同
 名物も出來觀光の名のりあげ 同 同
 二杯目のコーヒー男の意地で待つ 東京都 松井 蛙声
 好き嫌ひハツクリ言へて嫁き遅れ 同 同
 ふるる手のつめたさ我に返へらせる 同 同
 伊東温泉にて 同 同
 温泉のタオルまぶしき奥座敷 同 同
 四万台伊豆へ伊豆へとひた走る 同 同

病人の咳より暮し尙苦し 京都府 村本 香果
 幕間の藝者藝者に還るなり 同 同
 妹に借れば札まで匂ふなり 同 同
 人みしりせん兒の母の永病い 同 同
 故里の空氣うがい忘れてる 同 同
 ローマ字の賀狀わ娘だけに來る 佐賀市 南川 光男
 振袖のうごきかたるたの歌がへる 同 同
 松の内驛員くつたくたにされ 同 同
 お元日もう待ち呆けさす心算 同 同
 松の内過ぎてぼつ／＼叱られる 同 同
 句の友と語るに税のことも出て 和歌山 秋月 宏方
 生字引無能であつたとは云はず 同 同
 鯛にして見ればめでたい日でもなし 同 同
 筋骨隆々として嫁き遅れ 同 同
 競輪で大損競馬負け続け 同 同
 ハイヒールはかれて僕が可愛そう 尼ヶ崎 赤木 紅山
 お見舞の歸り糸くづ取つてくれ 同 同
 金もちでないのに弱い子に生れ 同 同
 つめたさが男心を引くんだよ 同 同
 お祝と書くに硯の水がいり 愛媛縣 米沢 曉明
 先生の荷物を提げて重くない 同 同
 輿論には勝てぬと知らぬ小役人 同 同
 乗りおくれ濡れて走つた丈のこと 同 同
 多数党芝居のような会をする 同 同
 ビストルがつぼつてからレインコート 愛媛縣 渡辺 曉童
 電氣スタンドみたいにグリア首をなげ 同 同
 老人にされて一合あてがわれ 同 同
 トランクも細引に依るほどつかれ 同 同
 大衆の支持失うてスト終り 東京都 石居 高志
 残業のソバを社長も來てすゝり 同 同
 ウインクを軽く流した氣持よさ 同 同
 パチンコで女房の苦勞一つふえ 同 同

秋 春 筆 雜



豪勇物語

丸山弓削平

私は幼い頃から英雄豪傑の話が好きで、
 九ツの時から、下男の張やんに毎晩講談を
 せがんで聞いた。小学四年になつて自ら眞
 田三代記を読み、中学二年に「噫無情」を
 読んだ。その間四年間、數百冊の講談本を
 読み漁つた。私が後年、眼精疲労で神経衰弱
 になつたのはあの頃の乱読が祟つた様であ
 る。ことほど左様に私は強いことが好き
 で、塙團右エ門や眞田十勇士、物外和尚等
 に血を湧かせ肉を躍らせたものである。
 ところが、昭和十三年妻と結婚して、は
 しなくも妻が豪傑の血統であることを知つ
 た。妻の四代前の祖、小四郎は大力無双の
 者で、或る時、慶び事の荷をきつしり詰め
 た長持を、下駄ばきの儘ただ一人で、片棒
 丈けを担いで峠の坂を上つて行つた。関口
 彌太郎が仇討の爲め駕籠かきに身を落し
 て、片棒だけで客を運んだ講談よりこの方
 が話が大きい。だが、その坂が今もつて、
 小四郎ヶ坂の名で呼ばれている。處を見る
 と、眞当に強かつたのだと実証されるので
 ある。
 この小四郎が「勸は俺の後継がで來ぬわ
 い」と嘆いた俵の勘吉が、身の丈六尺三寸

度し難き女なりけり後家を立て 廣島縣 黒本 芳泉
 家計簿を突付けて妻逆襲す 同 同
 結局はメンツが立てばいゝ本家 同 同
 こんな筈じやなかつた人に養われ 同 同
 借金のおさめ忘年会費借り 倉敷市 野田素身郎
 趣味にしちゃやが出過ぎる君の釣 同 同
 もう風呂でひげを剃るよな年になり 同 同
 木枯よ吹く女房は里にゐる 同 同
 お隣の時計も鳴つて長屋なり 大阪市 三木 泡起
 汚職記事意地になつて書きつゝ 同 同
 今にして妻子のありし兵おも 同 同
 自家用を借金するに乗りまねし 同 同
 ハローの子こで父の名を知らず 堺市 丹波 太路
 儲け過ぎるから出来てゐる二号 同 同
 紺紺着た役人に逢ふ日曜 同 同
 虚無僧は未だ幕末と云ふ姿 同 同
 ウィンクの代り娘は舌をだし 熊本市 花岡 英子
 わり込んで女結構腰をかけ 同 同
 お前の名書いておくよと年賀状 同 同
 門松が師走の風に吹かれてる 同 同
 たまに早起をして妻を怒らせる 布 味 流 純香
 氣違ひではないボクシングトレーニンク 同 同
 見合するための新車を買つて置き 同 同
 生命危篤信仰が足りません 同 同
 放浪の身に警笛の鳴り止まず 福岡縣 日高十姉妹
 給食を告げる時計を盗み見る 同 同
 賢夫人夜のモラルは別に持ち 同 同
 嬌声の去つて孤独の爪を噛み 同 同
 親として子の商才の頼りなさ 長野縣 高峰 柳兒
 産制と知らずひそかに孫を待ち 同 同
 子沢山同志慕し向きへ觸れ 同 同
 初雪へ早起の子に起される 同 同
 うなずいてだけ居て過大評價され 出雲市 久家代仕男

紙落し親の化粧が派手すぎて 同 同
 言訳の唇寒う座を外し 同 同
 御機嫌の褒らぬ内に子を使ひ 同 同
 幽霊で出ても税務署取る氣也 姫路市 小畑自由朗
 戦争屋を解除で又もばらまいた 同 同
 悪い事せにや損な様な記事ばかり 同 同
 待ち呆けもと来た道も帰られず 岡山縣 小林 鳴子
 菓子盆の最後の二つも頂戴し 同 同
 役得も仲間のよしみ分けてやり 同 同
 夜があけてみれば女に眉が無い 今治市 黒川 秀義
 洋服が一着出来る程遊び 同 同
 負け過ぎてスリルがあつた云へず 同 同
 翻然と悟り自分のこと言わす 大阪府 青柳扇子仙
 とはいえどみくびる心湧いてる 同 同
 童顔の神父めどらず老い給う 同 同
 心臓の弱を知つて値引され 東京都 田中 稻水
 金策は断られボン引は寄つて来る 同 同
 師走だと云ふに逢引まだつゞき 同 同
 エチケツトとかで女の後につき 廣島市 福岡葉留路
 女給また情熱のない恋をする 同 同
 サンキユーは分れどあととは何かしら 同 同
 三朝にて 同 同
 丹前で二流旅館と見破られ 鳥取市 森本法泉水
 佛様この頃菊にむせかえり 同 同
 お見舞にあらず時雨を避けただけ 同 同
 うれしさは山小舎の灯へ呼びかける 出雲市 野村 岬月
 たゞ雲の流れを送る僕だつた 同 同
 ボーナズで拂ひますよと飲んでる 同 同
 それぐの訛で話す港町 愛媛縣 藤田 博人
 ウキンチのキシリ港の朝が明け 同 同
 差押されてゐますと妻も馴れ 同 同
 家事は家事趣味は趣味と云ふ後妻 岡山縣 相原 一善

体重三十数貫の豪勇で、「鬼勘」の異名で呼ばれ近隣に及ぶ者が無かつた。鬼勘には沢山の挿話が残っているが、或時、米四俵着けた馬に出遭つた。酒に酔つていた鬼勘は「オイ、鰐、そこ除け」と言つた処、馬方は大いに怒り、ひとの馬を鰐とは何を申すぞ、お主にこれなる馬の担う俵が持てるかと喰つてかゝつた。鬼勘はやや両手を伸して、鞍ぐめに四俵の米を引抜いて馬方を驚ろかした。鬼勘が老齢に達して、旭河原の大土木工事に千人の土方が使役されたが、彼は徒然の余り、毎日周り一尺の青竹を携えて行き、土方相手に押棒を挑んだが誰一人彼に打勝つ者とはなかつた。土方一番の力持ちの留？とか言う男が、今日は俺が鬼勘の青竹を奪つて見せてやろうと豪語して勝負を挑んだ。満身を朱にして押して来る相手へ、鬼勘は悠容として「留、お前の力はそれ丈か」と言う、流石の血氣な若者もへた／＼と力が抜けて恐れ入つたと云ふことである。その時、鬼の勘吉は六十四、五才であつた。

勘吉に一男一女があつて、男の子が二代目小四郎を名のり、女の子のうちは小橋家に嫁いだ。二代目湯淺小四郎は鬼勘より遙に劣り、親子並んでゐると、全るで大人と子供位違つたさうである。それでも五尺八寸近く、若い時は二十六貫に及んだ。しかしこの小四郎は案外非力であつたさうである。私もこの人と一度会つて將棋を指した事がある。角力取の様な巨大な老人で、胸をうつ手で盤面を蔽つた。ちかの子が私の妻の父で、二十二貫あつた。小橋是太と言ひ、実業家で、岡山市政に顔を出しかけた時、大正七、八年頃の流感の爲め惜しくも四十五才の若さで死亡したが、堂々たる体

後妻もう社長夫人で切廻し
 收賄を取れる身分をうらやまれ
 よう肥えた犬にジロリとにらまれた
 貝塚市 上坂 朱人

M君手術死

トシコ節うたつて手術にゆきました

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

金の要る話へラヂオをどめじたち

小説「放浪記」をよみて

十田がこんなに使へる放浪記

晴着縫ふ胸はブランの多過ぎて

窓口へ札が渦巻く岡晴夫

あてられて満足してる里の母

すすき焼であちらの話聞かされる

細長い首で重役へまくし立て

ゴム靴が吸い上げている雪の冷え

賃仕事子の晴着にはまだどほし

ボリーナスへ右も左ものむはなし

借金のかたとはボリーナスあはれ

つゝましく坐つたわ女房金の事

空閑の淋しさ犬を抱いて撒り

アトリエの疲れギターなどかなで

夜逃した奴を見すごす師走なり

ボリーナスの手取の端銭煙草にし

四十二の女の河豚は見てをれす

ジャズバンドギンギンタカファン

平々凡々として元日の永いこと

ぜんざいの客へも辻占一寸立ち

天狗なを信じ鞍馬の里に老ひ

魔女めいて女易者の厚化粧

出張に同じバツチのそろう宿堺

敗るも奈良にはふるき佛たち

女房の六感バイ屋の前で待ち

家出する度胸を巡査に羨まれ

空想がさめ水薬へ手をのばす

考へておこうに労組だまされず

恋知らぬまゝに養子に行つちまい

俺に似て彼女も好きな旅日記

夢遠く今年もこゝに落葉焼く

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

軀とカイゼル髭は、或る眠で、時の大臣某

と間違えられて眠長室に恭々しく招じ入れ

られたと云う逸話を持つてゐる。

斯うした妻の家系を知るに及んで、私の

講談小説に培われた少年の夢がまたしても

風船の様に膨れ初めた。到底希んで成り得

なかつた豪傑の夢を、私は私の生れ出るで

あるう子供にかけだしたのである。私は十

三貫弱の蒲柳の質であるが、私の母方は相

当な大兵揃いであり、私の父方は力持ちが

多い私の父は小兵であるが、十七才で五斗

俵を担いだ青年時代村角力の大関であつ

た。メンデルの遺傳の法則によつて、隔世

遺傳が私の生れ来る子供に現われればせめ

かと思ひ及ぶに到つたのである。

それは誠に愉しい期待であつた。次々と

生れる子に、今度は小四郎、鬼勘の類いが

出来るだろうかと、その度に、子供が生れ

る度びと別の、もう一つの素張らしい夢に

胸躍らしたのである。だから、時折り新聞

記事に出る未來の横綱とゆう見出しの怪童

の写真を私は眺落した事はない。私は私の

子供に豪勇無双が生れたなら、必ずヘビー

ウエイトのボクサーにして、私がそのマネ

ージャーとなり、世界選手権を獲得して、

アメリカ三界をのし歩く稱りであつた。当

時、拳闘界はデンプシイ、タニイを経て、

褐色の爆弾ルイスが勇名を恣まゝにして

た。

ところが、最初に生れたのは長女泰枝で

ある。私は大いに失望落胆した。落胆の次

に襲つて来たのは不安である。私は慌てさ

るを得なかつた。何故ならば、この女の子

が長じて六尺三寸に余る鬼勘に似た大力女

になつては大変である。隔世遺傳は男の子

に現われて呉れなければ誠に都合が悪い

からである。幸いなことに泰枝は女大にもな

らず、先年弓削の路郎先生句碑の除幕式の

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

疊屋の疊のふちも破れどり 岡山縣 太田 又洲
一枚は後姿も撮つておき 同
お正月だからと妻に猪口を差し 奈良縣 平井 良兒
ボチ袋かえて年玉かへしどき 同
あつけないその死に様を羨まれ 和歌山 浅川 桑南
家建てゝ食わす飲ますをまた始め 同
七合の餅搗き樂しむ子のあわれ 岡山縣 伊藤 駄佛
同胞が喰べた雑草抜き捨てゝ 同
十二月女ますゝ墮ちるなり 岡山縣 水谷 谷水
浮浪兒の垢人生を超越し 同
賢妻の不覺出張信じ切り 大阪府 後藤 志津
雑沓で一層孤独にさいなまれ 同
恋の精算に鋭利十個とは悲し 高田市 岩垣日本村
お元日廊下に座つた顔でなし 同
我輩の時計質屋で除夜となり 岡山市 片山 百郎

無防備の一人歩きを案じられ 同
いつ死んだともなく遠縁墓がたち 愛媛縣 村上 旭堂
焼酎でないとあかんと小男の 同
けなげにも嫁は寒さの中え起き 岡山縣 大塚美能留
百姓にボナスと言う夢が無く 同
ズボン下探せば妻がはいて居り 兵庫縣 酒井ひかる
結構なストですなあど商賣人 同
老教授田舎臭さも尊かり 貝塚市 古田 雨郎
温もり給えなどと飲ませ上手なり 同
目印に見ていたセーター賣れてゐる 岡山縣 菱川紀代子
未亡人同じ悩みの友をもち 同
パチンコ屋工場ほどの音をさせ 宮崎市 野口卯之助
刑務所の中で名士も袋貼り 同
反橋をほうて渡つたハイヒール 高田市 戸田 嘉一
儲けたか又材木を積み重ね 同
二白も搗いて我が身の老が知れ 岡山縣 北口 草人

高貴藥有るとあるがと医者は去に 岡山縣 同
パチンコ屋顔も見せずに返事をし 岡山縣 峰尾 魚々
でこぼこの土間に焼芋椅子を置き 同
足許も軽くバレーの夢を追ふ 高田市 戸田 悦子
こつぜんと雲に消えたるやうな恋 同
産制を用のないのが聞いてゐた 岡山縣 池田 古心
生理日を帽に最初は逃げたけど 同
友達が女房欺す智慧を付け 兵庫縣 吉原 紅月
十二月十四日赤穂義士祭
再軍備論へ義士祭派手になり 同
やにさがり鼠のような歯を見せる 岡山縣 岡田 夜潮
ライオンのような入歯に抱きつかれ 同
婆さんの留守が淋しい氣がおかし 滋賀縣 土守トシ坊
飯縫ひが来て居る家庭羨まれ 同
停電の街に月夜が原始じみ 石川縣 塩谷三思樓
アルバイト凡そ浮世の裏にふれ 同
末席の隣同志はくみかわし 山口縣 加川 大然
孫ほどに可愛がられて咲いた菊 同
新聞社文化部長を退く(二句)
情勢の移りに「俺」が立てられず 米子市 石尾 鈍頭
腫孔深く編集権が沈澱し 同
呼びに來た客がパチンコさせられ 和歌山 岡崎 泰三
今過ぎた車もたしか四万台 同
四十台親の遺業に逆らわす 倉敷市 三島 寛造
警鐘をつかずにすんだ子のきてん 同
家出した意地がやくざの男にし 岡山縣 西山 秀峯
藝道の意地へはまれの文化賞 同
會議中第二夫人が押して入り 貝塚市 宮本 甲馬
妾宅を構えた頃に手が廻り 同
出世した官吏役得思ひつき 米子市 小西 雄々
二号或る日手切金の相場聞く 同
消火弾埃をためて無事な幕貝塚市 堀井 一峰

除幕を勤めた娘である。普通の体格で安堵の胸を撫で下ろしたのであるが、引續いて生を承けた子らは、哀れにも父親の切なる願望も知らないで、どれもこれも小粒許りである。五人目の四郎が色の白い人形の様な子であるに及んで、私の英傑待望の夢はもろくも穴のあいたゴム風船の様にしぼんで了つた。

子沢山と税金攻勢にグロツキーになつた私は、産兒制限を考えればならなくなつたのである。かくして私の夢は終つた。たゞ、つけ加えて置きたいことは、豪勇無双の子は生れなかつたけれど遺傳というものは、怖いもので私の子供達は、特に長男と三男は、私に似て滅法強い話が好きて最近までターザンのフアンであつたが、只今眞田十勇士横紙破り、五十人力の三好清海入道に夢中である。

伸びれば縮む

其の他

吉田 水車

伸びれば縮む

伸びれば伸びる程縮むものは何? トンチ教室の課題ではない。これはさる陸上競技のコーチの話であつて〇〇選手はまだまだのびること疑いない、そして今日のタイムをうんと縮めるに違いないと信じる、というのである。

ギョの語源

約二尺長さの猫の寝姿のような木彫りの動物が置いてあつてその説明に曰く



喧嘩見ててなぐられたやうなストライキ

戦後派の恋病院に忘れられ 京都市 三上きんや

足袋のつぎ仲人の眼に好もしい 同

寒いので薪割つたるかとも思ひ 京都市 若山 圭草

椅子に倚る女の腕の蛇に似て 同

初詣り母の歩調に合はずなり 京都市 田中 南桑

男の子母は見上げる程育ち 同

金に媚賣る娘になつてめぐり逢い 倉敷市 安原 桂月

私の家では無し懸賞の設計図 同

丸寝して朝が来てゐるお正月 京都市 鈴木加代子

相性がどうのど母が別れさせ 同

毒舌を遠まきにして座が白け 今治市 渡辺 逸

銅鑼の音に吾が夫の顔又浮び 同

満員バス美人の提げた長い花 高知市 岡本 元馬

禿げがボスだと思ふモーニング 同

安ホテル案外粹な庭を持ち 京都市 井上 吉造

面の妻へおいしく食べて見せ 同

行き過ぎた信仰へ妻老けて往き 大阪府 森本黒天子

停電へ盗んで見たい顔が居る 同

釣趣味が人命救助で褒められた 岡山縣 佐々木告天子

酒代を拂ひに寄つて根を降し 同

爪切りのあるにと鉄引つたくり 岡山縣 森尾 不老

出来心調べる方も泣いてやり 同

恋すればよいものと知る老らぐの 愛媛縣 青野天下堂

物干の病衣が写真に入つてゐる 貝塚市 中村 淳郎

俺の再起妻奇蹟だといふをらす 山口縣 重田 峰秀

学校の順で子供等家を出る 大阪府 西川 恵風

ワンマンに何所か似てゐる嬉ばれ 岡山縣 底谷 若芽

口返事と叱れど筋立つ十五六 高知市 松下一徹郎

鼠まで独りを馬鹿にした騒ぎ 出雲市 原 独仙

寝ようかと言へば二号は猪口を出し 香川縣 古谷 緑山

学友の名をばわすれる年になり 岡山縣 吉岡岡頂坊

惚れられた弱き博士も長官も 熊本縣 鹿本 実信

押賣がいつか社宅ととも馴染み 荒尾市 松本 風車

廣告のマツチ屋やつぱり廣告し 貝塚市 並木はじめ

思ふ娘の側へ割込む置炬燵 岡山縣 船曳 吞長

ボスの寄附ことわつて気が重なり 貝塚市 仲田 閑静

友達も皆禿げて居てうれしらし 兒島市 難波 鴻峯

縣議出て村には過ぎた橋となり 鳥取縣 龜崎 漫歩

この晴着明日マイシンにちて来る 岡山縣 田中 敬貢

断られ予定口数まだ遠く 愛知縣 松尾 北雷

停電に語らふ事も無き二人 出雲市 平井 芳風

昨日の娘が今日はあまりにも 今治市 兼永 柳雪

旧友に声掛けかねる派手な連れ 愛媛縣 八瀬田豚兒

孤兒院で育てられたと云う社長 大阪府 大村 木馬

パチンコの目が出て銭湯長うなり 岡山縣 河野 徳丸

汽笛まだ木枯の中に鳴つて居り 玉野市 迫田美婦適

スキヤンダル元委員長の影もなし 出雲市 佐藤まさる

買ひ出しの身は義経を偲ぶ程 下関市 伊織 柳坊

夫婦とは他人であつた乳が張り 米子市 勝田 正郎

恋もく純白のセーターでタイア打ち 大阪府 谷口 一昌

東京の自慢さよかと逆らわす 貝塚市 河楊 梵鐘

キツスしたことにし話進めたり 京都市 増永 秋映

貯めて貯めて死ぬ氣が隣の夫婦 島根縣 藤井 明朗

家風とは別アロハのシャツも着て 京都市 松川 杜的

のんきさは赤飯で知る誕生日 大阪府 小島 捨石

つめたさは笑ふ事さへ忘れさせ 大阪府 松本

自慢する娘へ成績表は疑はれ 大阪府 中沢

時の將軍が奉典する雅樂の終りを知らせ

たもので名を詠と云う云々とあり、よく見

るとその動物のシッポが背中と平行して一

文字にあるのを試みにとつて見ると、その

シッポが外れるようになつて居て、胴体は

空洞のようであるからシッポで腹の辺りを

打つと、木魚に似た音が出るものと推察し

た。まさかギョギョとは鳴らないだらう。

所でNHKの陽氣な喫茶店の発明にかゝる

と云うギョギョは上記の方が早かつ

たかも知れない。

註 右の註は当地M百貨店に於ける日光

展覧会に出て居たもの。

戦後の言葉

戦後に出来たわれわれの言葉の内です

ふんと変つたのがある。パンパン、ストリ

ツプなんかは下の下としてビニールが先ず

身近にあるのもうれしい言葉だ。おもいも

よらぬものに宝くじ、税金攻勢、ワンマン、

六三制、ヒロポン、ベニシリン、ロマンスシ

ート、ロードショウ、アギウギ等々アチラ

語の方が優勢の

ようで、悠の深

い所では特需新

特需、アンボン

なんて言うのは

いかついお役所

の名にしてはユ

ーモアがあるそ

してやたらエイ

ゴ混りの会話、

山之内

確かに避妊のために

サンシー

セント 250円
ゼリー 205円
局上 50円180円



川柳漫釋 (6)

小畑自由朗

「又あんた、え、歳しとつて、そ
ないな夢になんやら踏んだ様な事
を、あ、左様か、ほつ、成程、
虹が出てましたんかいな」
虹が出た！四十になつても夢を
もち (白香)

「ちえッ、猿まで馬鹿にしてやが
ら」

「おい、動物園来た時くらい
は、素直に童心に返つて、浮世の
事を忘れろよ」

「だつておめい、何もあの野郎、
急に俺の方え眞赤なケツ向けて搔
かなくつたつてい、じゃねえか」
おちよくつたように小猿は尻を
掻き (喜久堂)

「れ、あんた、糸へんの方」

「ちがうよ」

「ちや、金へん」

「女がすきへんだよ」

「まあ、いやーん」

アンタハン何へんと女給の訊ね
やう (栗)

「れ」

「お、お願です」

「お、お願です」

「お、お願です」

「は、僕と」

「なんですの」

「け、決闘してくれませんか」

「まあ、怖い」

「呀ッ！ま、待つて下さい」

しまつたあ、結婚して下さい
て云うのを、これや又とんでもな
い事を云つちまつたよ」
練習をして来た様に囁けず
練習をして来た様に囁けず
(七面山)

「呀ッ！危いッ、ごないしたん
やいな運轉手さん」

「すんまへん、蛇のご阿呆奴が道
を横切りよりましたもんやさかい
に」

「しようもない、クチナぐらいし
いて走つてんかいな、これみいな
花嫁はんの島田があんじよびよこ
いがんでしまひよつたがな」
花嫁のかつらが歪む急停車
(笑泉)

「何云うてなはんれ、あんたのヤ
ヤやさかいにあんじよう生んで見
たい云うて、小細工もせんとあず
こ迄辛棒して来てまんねやないか
いな」

「そやけん、先の男と手切つた
月からふくれたとなると、そのこ
けじ目がごだいや、こしいがな」
「そら又何を云いなはるねやいな

「じゃ、君はどうしても、結核の
予防と云う様なつまらん事に、八
百億円を浪費しようとするのか
ね」

「いえ、別に、その、私が是非に
と云う様な暇じやないんで御座い
ますけれど、何しろ、世論がケ
ンケンゴウゴウと致して居りまし
て」

「じゃ、君の勝手に仕給へ」

「はッ、申訳が御座いません、予
算の御都合で、なんだつたら、全
國の結核の療養所に、閉鎖を命じ
てもよろしゅう御座います」
世論より首相の御氣嫌氣にか、
り (一峰)

「お一人さんですか」

「一人やつたらいかんのかいな」

「い、え、どういたしまして、さ
あどうぞ」

「あれッ、こゝ寝て酒吞ますのん
かいな」

「はあ？」

「なんやいな、こゝ宿屋と違
うか」

先の旦那と分れる前から、あんた
が精出してオチヨツカイしりな
はつたんやないかいな」
よう考へやすと女將に意見され
(竹莊)

「あれ、又晩に成りよつたがな」

「腹へつた、早う御飯憶えしてよ」

「うるさいな、お父つあんめし憶
えばつかしとつたら、肝ちゃんの
仕事がちつとも出来へんがな、ほ
んまにお母んごないしてけつかん
ねやいな」

「ごなしでけつかんねや云うたか
て、昨日の晩汽車に乗りはつたん
やもん、まだ九州に着いとつてや
ないくらいやがな」

「しようもない、自分が嫁をもら
うねやあるまいし、弟が嫁をもら
うくらいな事に、なんで又あいつ
が九州迄帰えらんならんのやい
な」
妻の留守飯の仕度にかゝりはて
(無鬼)

「ナンイッテヤガンネ、オレガビ
ツチヤースルンゲイ」

「イヤデ、オメエアンパイヤス
ルツテ、イッテタンチヤネエカ」

「ナニ、アンパイヤダツテ」

「ア、オレアンパンホシナツタヤ
イ」

ビツチャイがどうのこうのと
幼稚園 (五爵)

「今日わあ」

「へい、おいでやす」

「僕、引揚者授産協会の者なんで
すが」

「まあよろしいわ」
断られそうに押賣至るかけ
(愛論)

「一品料理と生そば
グリル 芝 鶴
上六キヤビトル映
画館 東三軒目

「お一人さんですか」

「一人やつたらいかんのかいな」

「い、え、どういたしまして、さ
あどうぞ」

「あれッ、こゝ寝て酒吞ますのん
かいな」

「はあ？」

「なんやいな、こゝ宿屋と違
うか」

「へい、浪花ホテルだすんやけん
ど」

「ホテル？、無茶云いないな、わ
て、看板のネオンにナニワテルと
出てるもんやさかいに、酒場かと

酒販用アイスクリーム用紙コップ
其他食堂用紙製品一切



特殊紙器工業株式会社
フタバカツブ株式会社

大阪市阿倍野区晴明通一丁目

電話 天下茶屋 2802 2803



源氏物語の作者

紫式部

富士野鞍馬

このごろ劇や映画、読物などに「源氏物語」が使われて大衆が古典に興味を向けつゝあることはよいことで、源氏物語が再認識されたともいえる。この世界的長編小説は、千年前の女性、紫式部の作であることは誰でも知つてい

たといふことになつてゐる。石山寺の縁起は、「村上天皇の皇女大斎院より或る時、上東門院へ何か珍しい物語でもあつたら見せ給へ」と請われた事があつた時、上東門院は紫式部に仰付けられて、何か物語を書くようにとの御意であつたので、式部は石山寺に参籠され、観世音に祈願して、お告げを蒙り、大般若經の料紙を本章より賜り、須磨、明石の巻より書き始めた。

式部は平安朝中期、一條天皇の御代の人で、藤原爲孝の娘、右衛門権佐藤原宣孝に嫁して二子をあげたが、夫に死別し、その後は上東門院に仕えて、「樂府」(白紙文集の新樂府、當時宮中よく読まれた書)の進講もしたという和漢の書に通じた大文学者であつた。「源氏物語」は夫にわかれてから、長保、寛弘年間(一〇〇〇—一〇〇七)三十才前後に書かれ、その頃の貴族生活の裏面史ともいえるもので、モデルも写実もあつたと思われる。

ところが傳説では、式部は石山寺に籠つてこの物語を書

若経に、須磨、明石の兩巻を書初めしとぞ。それより次第に書くわへて、極中納言行成卿清書し給ひ、齋院へまゐらせけるといふ。天台六十巻をうかがひ、一心三觀の妙理を悟り得るといひ傳ふ。

と書いてある。それで古川柳はみなこの傳説によつて作られて

石山につくれんとした美しさ

(タル二)

石山も二ヶ月程は紫衣寺也

(ツ 二二)

紫の硯にうつる秋の月

(ツ 三三)

石山でしばらく息を月の陰

(ツ 六六)

物語書くうち所化に氣をもませ

(ツ 七七)

珍らしい事石山の庫裡に鉄漿

(ツ 一〇三)

石山で式部は赤い月も見

(一五九)

石山で月の苦勞は女旅

(ツ 一六一)

物語疵のない夜の月で書き

(ツ 二八)

みなもとは月から浮ぶ物がたり

(ツ 三九)

石山で御代にゆかりの物語

(ツ 九六)

石山は女筆指南の元祖なり

(拾四)

等といづれも石山に籠つた式部を詠んでゐる。

この「源氏物語」は五十四巻から成り、その各巻に「桐壺」「帚木」「空蟬」「夕顔」「若葉」「末摘花」「篝火」

「螢」「野分」「須磨」「明石」といふような名がつけられて、その巻名が川柳に詠み込まれてゐる。

石山で須磨や明石の物あんど

(タル二八)

篝火ハ元へ源氏の魚が寄り

(ツ 四五・七一)

篝火は光る源氏の春と冬

(ツ 五四)

篝火は今も源氏のまきを焚き

(ツ 六一)

篝火ハ源氏は光る一の谷

(ツ 一二)

石山で作る若葉のやわらかし

(ツ 六六)

石山で鼻の赤いも一人書き

(龍 三)

源氏の御代に空蟬の具足櫃

(タル一九)

螢の巻は近所から思いつき

(傍 二)

宇治の螢がそれ来て巻となり

(タル五〇)

帚木があつて塵なき物語り

(ツ 五四)

御殿女中や花魁の源氏名とい

うのはこれから出たのである

源氏名は末摘花が賣れ残り

(タル九八)

末摘花は鼻の赤い女に作られてあつた。

元々貴族生活の裏面描写でもあつたので、いろいろす

つばぬきや、恋愛を取扱つて

あるので、

石の上で和らかなる物語

(タル一四五)

石山で出来た書物のやはらかさ

(拾五・タル三五)

石山で紫女堅くないものを書き

(タル六一)

光る君内のまくらはいらぬなり

(ツ 三六)

性わる一代記を石山で書き

(傍 二)

名高きは石で碎けた物語り

(タル 五七)

平家琵琶と結んで、

(タル一一)

源氏平家は琵琶で書き琵琶で弾

き

とも詠まれてゐる。

五十四帖は六十帖の紙を使

つたので、

六十帖も紙要る物語り

(タル三四)

石山の草紙一割引で出し

(ツ 二二)

石山で一割引の書物出来

(ツ 八一)

妄悟戒破つて五十四帖書き

(ツ 八六)

五十四帖石山の月にかき

(ツ 一六一)

一割は雲にかくれし物語り

(ツ 一五)

五十四帖を書いて三十六へ落ち

(ツ 一〇六)

また藤式部といつたので、

石山で藤紫に咲きはじめ

(タル五八)

紫に潮水で藤の色をあげ

(ツ 五九)

又紫式部の作歌は、定家卿

選の百人一首にも入れられて

いる。

百首にも源氏一帖式部よみ
(タル四一)
五十四は石山百は小倉山
(七一八九)

その歌は

廻りあひて見しやそれともわ
かぬ間に雲隠れにし夜半の月
かな

であるが、その次に列んでい

有馬山いなさき原風吹けば

いそよ人を忘れやはする
は式部の娘賢子、大貳三位

一井の局の歌で親子が並んで
いるのを

兄弟も親子もならぶ百人一首
と詠まれてゐる。兄弟は行

平、業平である。

ところで安藤爲章の「紫家
七論」には

「実に式部が夫に別れ、二人の
子を守つて徒然として寡居して

ゐた無聊に堪へかれ、すでに世
故に通じた身であるから、その

経験、見聞の彼是をとり交ぜ、
想像の糸を以て巧に綴り合せて、

この名著を作り出したもので
あらうと思はれるが、決して

大斎院の御求めによつて、急に
石山寺で書き出したものではあ

るまい」
「物語は式部三十歳前後にて作

れるなるべし」
「大和もろこし共に、聰敏なる

人は何事によらず、不日にその
功を成すものなれば、此の物語

も思の外にやすくかけるものな
るべし。後の人、にぶき生れつ

きを以て例する故に、奇妙不思
議の思をなして、観音の冥助、

石山寺の縁起、当寺に参籠さ
れ、観音に祈願して云々、或は

父爲時が力をそへ、或は御堂殿
の加筆など様々の臆説申すめ

り、皆式部を知らず書を考ふる
におろかなりといふべし」

と石山寺の縁起を否定して書
いてあるので、大抵この説に

従つてゐるようである。

この頃、外にも女流大文学
者として、清少納言の一枕の

草子も長保二年の作といわ
れ、伊勢大輔、小式部内侍等

があつた。

江戸時代になつて、この源
語の翻案をしたものが五、六

種あり、柳亭種彦の「田舎源
氏」はその中の有名なもので

ある。

式部は当時の権勢、門院の
父である関白道長が挑んだ

が、はねつけたといふことで
あるから、意志強固なピンど

した美人であつたことがわか
る。残念なことには没年はわ

からない。

源語の流行で、川柳から紫
式部を偲んでみた。

千年の匂いがつく源氏の間
鞍馬

一路集

女將 古川魔花麗選

無い客と見ると女將は眼で知ら

取るだけを取つて女將は別れる氣
大彦

タンカ切る女將で涙もろいたち
五風

何へんと探る女將の採手する
わたる

女將さんは猪口一杯で引退り
七面山

女將にもあつた心だけの恋
英子

女將だけ次の大匠知つて居る
自由郎

女將さんへ告げるといふ娘は見え
千代男

世話好きの女將笑つて引受ける
葉光

籠絡の恋に女將の手を借りる
代仕男

軽い嘘云つて女將にねだれる妓
曉舟

諸など云はす女將の瞳がきれい
三思楼

氣弱さを女將に一つごやされる
方大

みんなまで言はせ女將引受ける
薺花

公儀の裏を女將は知りつくし
同

もみ消してあつた女將座をはずし
谷水

木石やさかいと女將さうげなし
同

女將にもあつた悲しい過去の恋
鉄兒

落籍されてからは女將と云はれる身
同

大構へ女將としてのエチケット
水車

こんなことマダムにもある過去のこ
実信

ひたよる女恋へマダムは瞳を閉ぢる
同

妓を叱る女將に過去の悔があり
木声

部屋の中へ女將の酌で飲み
三葉

洋風に改えてマダムと呼び変へる
忠美

長火鉢女將の朝の上喜撰
折草

伊勢時が似合ふ女將の嗜好み
富郎

切れる氣の女將の口の強いこと
川鳥

或日女將嫉妬を若い妓に覚え
十九平

響寮で女將さうまで顔が利き
芳仙

珠簾を入れる女將の水コップ
羅漢

ベンチヤラで一日暮れて寝る女將
甲馬

政壇へ少し女將の智慧も入れ
侃流

色機嫌女將は今宵酔ふて居り
芳泉

商賣用の笑顔は別な女將さん
万年

知れぬ子を女將は思ひ月に泣く
山雨楼

佳吟

吉田さん少しは知つて居る女將
山雨楼

女將ふと稼業に疑問持ちはじめ
十九平

拍手の音も女將と云つた音
不二

女將さんやつぱり筆を持つ姿
水車

女將だけあつて惚れたも露骨なり
古心

女將さん取るものだけは取つてお
七面山

若い燕にだけは女將も女にて
自由郎

足袋はだし女將の方があわてだ
一善

多情佛心めいて女將の燃る恋
魔花麗

麻生路郎著

水武書房版

針小柳海彦

好評

川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新
指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなもの
か」から説き起して收むところ三十七講、平明で親切で、初心
者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを會得する
ことが出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書で
ある。敢て一読を薦む。

(B 6 版 二二頁)

定價一〇〇円 送料十六円

取次御注文は

大阪市住吉区南瓦町五丁目二五
電話口番大阪七五〇五〇

川柳雜誌社

盛會だった 第二回

山陽新聞読者川柳大会

満場路郎師の柳話に感銘

第二回山陽新聞読者川柳大会は過ぐる十二月九日午前十時から岡山市の山陽新聞社講堂で開催された。この日師走にしては珍らしい麗かな晴天に恵まれて、中国、四國地方の柳人百四十三名が出席、投句百二十一名という、地方の大会としては新記録を作る盛會であつた。

この大会は、主催の山陽新聞社が昭和二十四年十二月夕刊を發行してから、毎月読者文藝として川柳を懸賞募集し、麻生路郎師を選者にいただいているので、選者と作家の顔合せを兼ね、夕刊創刊記念の十二月を機会に読者川柳大会を開いたのである。昭和廿五年の第一回も出席者は百名を突破し、なか／＼の盛況であつたが、第二回はさらに一層の盛會で、毎年この調子で出席者が増加すれば、將來物凄い大会になるのではないかと、路郎氏も大変な期待をかけられているのである。

しかも出席者の大部分は初心者が多く、会場は極めて純真素朴、初対面の人たちが互いに謙虚な挨拶を交わしている風景は、美しくも微笑ましいものが漂っている。

あたかも、通信教育を受ける地方の人たちが、スクーリングのためはじめて都会の學校に登校したのにも似たものがあつた。

遠隔の人は前夜岡山市に來て一泊したものがあり、なかには午前三時に起きて、未明にわが家を出発、定刻にやつと間に合つたという熱心な人もあつた。

路郎師は上田翠光、北川春巢両氏と同行、前日は川維備前支部の句會に出席されて、浜田久米雄氏宅へ一泊され、当日は定刻までに会場へ到着、控室に休憩中も挨拶に來る柳人たちの應接にいとまもない状態であつた。会場に入れば、温顔を仰ぎ見る視線が集中し、やはり師弟の温い血のつながりが脉々として通じるのである。

そして路郎氏の柳話は「社会」という演題で、新聞の記事を引例し、社会の出來事と川柳眼とを巧みに説き來り、恩師が師弟を導くごとく、諄々として盡きるところを知らないものがあつた。話術というより愛情というべきものであろう。いままで何回となく柳話を聞いた人たちも、今日ほど深い感銘をうけたことはないと思懐する。

ほどの熱弁であつた。

兼題七題、席題三題の披講は例によつて、川柳ならではの楽しい零閑氣をかもし出し、しば／＼哄笑、快笑、微笑をくりかえし、終始和やかな空氣のうちに、三光入賞者はそれぞれ賞状賞品を授與され、満場拍手のうちに大会を終つた。

この大会の特徴としては、賞品川柳の弊害に陥つてはならぬという戒律を守り、賞品は極めて簡素で、永らく記念とするに足るものを選ばれたこと、選者の選定も、賞を贈つたことであらう。

大会ののち、春巢氏は所用のため会場より直ちに帰路につき、路郎師、翠光氏は川維岡山支部である藤本満年宅に立寄られ、在岡の

不朽洞會員との間に打ちくつろいだ柳談會を開いたのであつた。直門の弟子たちと語る路郎師は好々爺になり切つた形で、夜の更けるを忘れるほどである。疲れ直ちに一献傾けることになつて、因らずも、元氣一杯の翠光氏にや、酒盞が集中する傾向があり、氏は忽ちにして路酌してしまつたのである。頑健そのもののごとき翠光氏



於山陽新聞社講堂

熱人の路郎師の柳話

が、こんなにも弱い酒量とは誰一人氣づくものはないが、かつたのが甚だお氣の毒なつた。余程辛棒をしたおけく、遂に堪らずしてごろりと横に倒れ、雷のごときいびきをか

きはじめたのである。それではならすとして寢床に誘えば路郎師の寢床にぐつたりと入つて動かさず、いびきに続いて何やら大声を発して寢言である。さすがの路郎氏も腹を抱えて大笑される始末である。翌朝の話では、寢床の中で大いに身体を運動し、足で障子を開ける盛當もあつたとのことであるが、路郎氏以外には眞実を知るものはない。後日翠光氏は満年宛書信のなかに「氣をつこてくれたのに寢言いうちまい」とあつたほど、氣をつかうていたのに、こんな出來事を天下の川柳雜誌に素つ破抜くのは、いささか良心にとがめるものを禁じ得ないが、旅の恥はかき捨てというし、飾らざる友情の交流こそ柳界に親睦を増すものではないかと思えば、敢えて翠光氏旅日記の一節をご披露におよぶことにしたのである。

なお山陽新聞の読者文藝の川柳懸賞募集はすでに二十五回を重ね、一人はがき三句の規定により、多き月は千六百通、実に四千数百句という膨大な応募があり、多忙な路郎師の手を煩わすこと甚だしきものがあるが、師は何人の手にも触れさせず、全句を厳密に選句されている。單なる情表で出來ることではない。川柳に対する崇高なる信念にはかならないと、今さらのごとく頭の下る思いを深くするものである。

(藤本満年記)

同舟近詠

雁玉さんに十郎さんの名コンビが老眼鏡でマイクに行ち、頻りに天高き秋を肥した。次々に演るメ



の洞朽不

喫煙室

水谷 鮎美

ンバーも、それにうまのつてゆくあたり堂に入つたもの、家庭では楽しく聞けるが、現場では鑑客も神経を失はして一寸場違の感じがする。
「やあ豆秋と鮎美や」と後ろの方でおほきな声がかかる。振返ると亜鈍、晴峯、貞女さんが笑っている。副骨、正司、哲水もある。ほんとに楽しかった。
期せずして寄つたのに驚くも秋が

車内のピン六君

岐阜 東野 太八

魚鱗のイメージによせて

むつかしいことわかりませんといういわし予備隊の好きなさんまの若い衆
教養がちとあり無茶もするかつお目のことをいえばかれいはずぐひがみ
鯖いわく俺は元來社会党
帯上げの紅さを小鯛みせにくる

大阪 橋本 緑雨

両親のいないふるさはぬくもれず
花嫁を見送る人でホーム満ち
パチンコ屋出る老人のあわれなり

松山 前田 伍健

新婚の娘え産制をそれとなく
偽されて温室に咲く花に似て
年寄りの財布鈴つけ紐をつけ
株の値をこたつて話すいゝ生活
笑うから笑い返した人違い

鶴の深い朝だった。尼崎から急行に乗替へてふと見ると奥に申分のない青年が新聞をみている。それが角一ゴムの白鷺会のホープ尾野ピン六君だった。作句道場では童心的な彼も、社会ではがっちりとしたくまのいので頼母しく慰へた。川柳がこの青年層に手堅く拡がつてゆくことが娘の婿のようにうれしかった。

延永 忠美

うまればびんこの尾道だあ
ろく十余年の過ぎ越しこそ
じつに生きてる柳史てふ
ふ朽洞の老あるじ
その名は永久に残るだろ
あゝ柳境の子規と云う

不死 鳥

腕時計を盗られて、しばらく時計なしで暮らした。時間外れに食事をするので、はじめのうちは今、二時か三時か見当がつかなくなつたが、しまいにものはもの十分も過わないようになった。機械に頼りすぎてカンの力を失つていたのである。近ごろは時計を持たない人が相当多いことを自分が時計を持たなくなつて知つた。又時計を求めたので時間に対するカンが鈍くなることであらう。
麻生路郎先生

壽像贈呈者御芳名

十口 平岸市 木村 孤浪
像付 一口 高田 茶撫郎

一口 大蔵市	川村 伊知呂	一口 大蔵市	川村 伊知呂
一口 大蔵市	村田 眉丈	一口 大蔵市	村田 眉丈
一口 大蔵市	大森 娛句樂	一口 大蔵市	大森 娛句樂
一口 大蔵市	浜田 久米雄	一口 大蔵市	浜田 久米雄
一口 大蔵市	備前 支部	一口 大蔵市	備前 支部
一口 大蔵市	池田 可宵	一口 大蔵市	池田 可宵
一口 大蔵市	藤岡 至藝瑠	一口 大蔵市	藤岡 至藝瑠
一口 大蔵市	八木 慶天郎	一口 大蔵市	八木 慶天郎
一口 大蔵市	岸 南柳	一口 大蔵市	岸 南柳
一口 大蔵市	水田 草骨	一口 大蔵市	水田 草骨
一口 大蔵市	前田 伍健	一口 大蔵市	前田 伍健
一口 大蔵市	石岡 正司	一口 大蔵市	石岡 正司
一口 大蔵市	小川 恒明	一口 大蔵市	小川 恒明
一口 大蔵市	山本 葉光	一口 大蔵市	山本 葉光
一口 大蔵市	久我 野光	一口 大蔵市	久我 野光
一口 大蔵市	白砂 旋風	一口 大蔵市	白砂 旋風
一口 大蔵市	横野 亭駒	一口 大蔵市	横野 亭駒
一口 大蔵市	竹川 河舟	一口 大蔵市	竹川 河舟
一口 大蔵市	古川 麗花	一口 大蔵市	古川 麗花
一口 大蔵市	市岡 曉舟	一口 大蔵市	市岡 曉舟
一口 大蔵市	内藤 草一郎	一口 大蔵市	内藤 草一郎
一口 大蔵市	北川 雅一	一口 大蔵市	北川 雅一
一口 大蔵市	瀧 純香	一口 大蔵市	瀧 純香
一口 大蔵市	築山 快夢起	一口 大蔵市	築山 快夢起
一口 大蔵市	池田 泉永	一口 大蔵市	池田 泉永
一口 大蔵市	羽佐間 柳葉	一口 大蔵市	羽佐間 柳葉
一口 大蔵市	三輪 晚翠	一口 大蔵市	三輪 晚翠
一口 大蔵市	並木 東太楼	一口 大蔵市	並木 東太楼
一口 大蔵市	斉藤 芳雨	一口 大蔵市	斉藤 芳雨
一口 大蔵市	浜田 稻石	一口 大蔵市	浜田 稻石
一口 大蔵市	遠藤 青蛙	一口 大蔵市	遠藤 青蛙
一口 大蔵市	突戸 潮風	一口 大蔵市	突戸 潮風

川柳不朽洞会

川柳削弓 部支削弓 社柳川削弓

不朽洞会員
丸山弓削平
直原七面山
福島 鉄兒
服部十九平
杉山 一貫
高山 朗笑
横部 牛歩
家本 富至
直原 瀧月
黒田 久米女
黒田 笑泉
弓削川柳社一同

西垣 錦風

奈良縣生駒郡伏見村
菅原九〇〇番地

水谷 鮎美

ひとり旅雪海におち海に落つ

岐阜縣加茂郡太田町深田
古藤榮太郎方

東野 大八

寒中御伺

一路集

仲人夷一笑選

三年目仲人お茶も汲まれない
初産へ仲人からも祝が来
仲人を笑顔で帰す新家庭
初めての仲人小さく座に坐り
仲人が別な縁談持つて来た
仲人がちと若過ぎで不安なり
仲人馴れた口振が氣にかゝり
お返事は如何と仲人せきたる
仲人の役がうれし観世流
向うでも變れば仲人戻つて来
仲人にまかせた返事氣に懸り
仲人になつて一升買はされる
言ひ慣い事は仲人へ持つて行き
嫁き遅れあるのに人の世話をき
世間態だけの仲人叔父を借り
仲人は課長に頼む社内組
とてつもない話仲人持つて来る
仲人も小さい嘘は軽く言え
仲人は猫の毛並も褒めて去に
仲人はあんな女を見せたがり
避妊法なども仲人しやべりたて
双方へ仲人うまう色をつけ
仲人をそる／＼うちむ頃となり
仲人は身長までも聞いて去に
仲人と父のピンとがやつと合ひ
けなしてははめて仲人抜日なし
良縁にして仲人の氣がつかれ
仲人にははをつかれすゝめられ
仲人の責任とことん酔へもせず

代仕男 千代男 櫻子 摩太郎 美智子 雄々 三思樓 芳泉 紅月 帆加夫 水堂 粗粒 光郎 不老 葉留路 好郎 四案 忠美 日満子 祝平 折草 曉舟 曉明 七面山 山雨樓 太路 薺花 牛歩 方大 滿年 楊子 十九平 谷水 一 笑

集金 川村好郎選

作戦を授け集金員を出し
集金えふくれた金の暖か味
旅費引けば集金靴だけ残り
粹筋の集金素早く支拂はれ
同郷と分り集金人茶をよばれ
給料日集金表で待つており
釣銭へ集金人は世辞を添え
集金へ苦情まだ／＼続きそう
玄關へ両手をつけば電燈代
集金は主人の趣味を見逃さず
集金人喧嘩の家は諦める
集金と調染になつて断られず
弁舌さわやかに集金断わられ
集金は家庭の愚痴も聞いておき
集金人又税務署と間違はれ
酒飲んで集金に出る氣の弱さ
言ふだけは言はして集金やり取り
え／＼とこへ来た集金奢られ
掛取りはボーナスの日も知って居り
集金に妓素顔のまゝで来る
集金へ有るか無いかの火をせり
税金に持つてかれたと金呉れず
賞はれば掃らぬ煙草つけ
女將今日集金と云は世辞の良さ
御不幸があつて集金とも云へず
集金人習の鉢まで褒めて去に
集金を断る妻のあざやかさ
人癪癪もたてず集金今日も来る
地・集金人自分の金も少し持ち
天・集金がよつて帽子を忘れて来
軸・神様を念じ集金敷居越へ好郎

★動靜★

▼本社新春句会は一月五日午後六時から
大宝文化会館三階で開催▼市交通局川柳
会では一月十三日午後二時から文化祭及
大交會館落成川柳大会を開催▼水府民還
屏祝賀全國川柳大会は一月十五日中央公
會堂で開催▼一路川柳会は一月十七日午
後五時半から高島屋飯田株式會社で開催
▼文藝懇話會は一月十八日午後三時から
北浜三丁目道塾（緒方洪庵遺邸）で開
會を開催▼南区醫師會文化部杏林川柳會
は一月廿二日午後七時から無名林居で開
催▼南海電鉄川柳會は一月廿五日午後五
時から南海高等學校で開催、以上何れも
路郎主幹出席▼今治川柳協會（今治市）
の忘年川柳會は十二月廿一日に瀬戸内運
輪會社で開催された▼日の丸川柳會（鳥
取市）は一月七日の丸自動車株式會社
事務室に於いて開催▼小瀬自由朗氏は
路市白濱南住宅六四号地へ移居▼村上角
堂氏（元不朽調會員）が十二月二十二日
永眠された、謹んで悼む、自宅は大阪府
豊能郡箕面町牧落一六四▼平井良氏（
奈良縣）の大阪勤務先宝物産株式會社
が東区宝町三ノ一七へ移轉▼一月九日
は「三日日」の誤り▼十一月十日
四頁下段、淺田右門一教授の待遇の記
事十九行目の二五〇〇は二五〇〇、三千
田は三千弗の誤りに付訂正する。

社の黑板

▼麻生路郎主幹の揮毫作品を左の小規に
より頒布する。

短冊 一葉 三〇〇円
同（新年四季）五葉 一二〇〇円
色紙 一葉 五〇〇円
同（新年四季）五葉 二〇〇〇円
軸・額・小物、表裏なし、二〇〇〇円以上
先生の作品で御希望の句があれば御
指定を乞う。揮毫作品が出来ましたら
御通知する。 川雜サーピス部

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字を正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月廿五日▼投稿先本社宛

本社新春句會 (大阪)

一月五日(土)午後六時

於 大宝文化会館

千九百五十二年の新年句会開會に先立ち、五時から五時四十分の間に、昨年の不朽優勝カップ把持者の決戦句会を行ふ事にした。昨年は三回連勝の人がなかつたので、所有者なきカップは依然会場正面の卓上で本年度のニューカップと混み合つてゐたからである。当日の決戦の選手は香林、博也、哲水、生々庵、妄夢、花村、喜久堂、愛蘭、文蝶、翠光、久仁於の諸氏であるが、出席不能の爲香林、妄夢、花村の三氏は棄権された。課題は「スローモーション」一人三句、課題師選で、廿六年度の不朽優勝カップは生々庵氏の獲得するところとなつた。不朽詞表彰状授與に就いて、鮎美、夢裡、愛蘭、哲水の諸氏へ本社句会一ヶ年全出席の表彰状を授與した。路郎師は大晦日から健康を害され病床からおして出席されたので柳話の抜擢に事になり、上田翠光氏が代つて新年の挨拶を述べられた。席題兼題披露の中間へ繰り込んだ霞乃女行司の相模吟は作句時間五分間、赤組の披露は春柳氏、白組の披露は哲水氏で、白組大いに有勢勝利の旗を揚げた。不朽優勝カップは本年一月から路郎師選の天位の人々が把持する事となり、三回の連勝者なき時は來春決戦で各題天位入選者も選手として参加出来る事に決定された。

雪月の不朽優勝カップ把持者は西尾某氏であつた。閉会後西尾某氏を取り巻いて、自作川柳漫画を希望するもの、似顔を依頼するものなど賑やかだつた。

出席者 路郎・久仁於・生々庵・文蝶・愛蘭・沐天・哲水・翠光・三司・無人・喜久堂・淡舟・木声・六竜子・水堂・正司・一杉・わたる・没食子・博也・塔仙・紅山・梅里・胡蝶・幸男・黒天子・瓜平・帆加夫・鮎美・春柳・恒明・小松園・万樂・義英・白柳子・晴峯・貞女・夢裡・柳亭・栗・竹莊・へとち・P.O.E・梨里・霞乃

兼題「元日」 麻生 路郎選

元日の水を両手で受けて見る 小松園
お元日東矢鯉に氣にかゝり 胡蝶
お元日子に耳くそをばじくられ 同
せめてもの足袋だけかいてお元日 白柳子
元日にたどり着いたと言ふ家計 醉歩
元日やお前もゆつくりしたらさや 恒明
元旦の足はきつちり下駄の上 小松園
吊り皮にゆられ工合もお元日 生々庵
元日の早寝三度目をさまし 一杉
元日から替わる小説妻も読む 万樂
元日やハイ／＼と妻若し 栗
俺に似た兄元日え一人殖え 六竜子
とつてたベンチやもよしお元日 栗
かわるがわる肩叩かせてよい元日 瓜平
恋人がなくて氣樂な元日 辛男
元日に勤める靴を妻揃え 水堂
元日もくそもおへんヒステリー 恒明
元日を奴隷のようにかごへ立ち 瓜平
元日におもちや屋敷が店をあげ 十九平
(人)元日はさすが鮎は持つて來す 梅里
(地)N.H.Kの雅樂で屠蘇を祝ふ幸 木声
(天)義理がたい人に元日起される 栗
(軸)元日を母はやつぱり留守番さ 路郎

兼題「慾」

土井 文蝶選

慾得て出來た仲ではないと拗ね 梅里
へそくりの妻へ小さな慾があり 胡蝶
眼帯の片眼に慾の深さこめ 瓜平
久方に手土産提げた慾の皮 無人
強慾な親に似合はぬ子に育ち 貞女
親切の奥にちよつぱり慾が見え 喜久堂
慾の皮厚くて涙も出らんらしい 梅里
慾そうなる顔で胡麻化すもや返し 淡舟
此の上の慾長谷川一夫に似てはい 愛蘭
出し殻の茶で食慾を開かされる 瓜平
慾の無い男にからて座を下り 帆加夫
國民の慾をかくらふ宝籤 紅山
慾のない人をだまして落ち着けず 翠光
慾のない男が虫がすきますの 晴峯
夜夜夜業たぐ眠りたいだけの慾 万樂
ウインドを見て娘の慾が芽生えてき 鉄児
慾ふかく喧嘩も強い子をかばい 沐天
慾のない顔はさぞ眞青だるう 哲水
轉んで只で起きない生れつき 恒明
慾の無い男事務所の隅で朽ち 七面山
(五)無慾活潑母は泣く日の多かりき 六竜子
(五)も慾を離れ病人眼の寂し 愛蘭
(五)慾もギブスの中の僕を見る 木声
(五)慾得てないと仲間如才なし 春柳
(五)慾は鼻がとがつたパチンコ屋 鮎美
(人)慾張つた足がバナナの皮を踏み 小松園
(地)慾深いのに神様が先づあきれ 没食子
(天)算盤ではちけぬ慾で子が育ち 生々庵
(軸)その慾を軽く押さへて茶をすすめ 文蝶

兼題「羽織」 松江 梅里選

借りものの羽織を脱いで酒にする 久仁於
羽織着て來た棟梁へ設計図 万樂
陳羽織男涙は見せぬもの 恒明
隠し羽織の裏でまかり出る 瓜平
羽織ちとすらして女口を出し 万樂
縦紋の羽織うれし返事持ち 小松園
わし國の三味に羽織の紐を解き 日調子
炬燵から羽織をたお手を見つめ 栗
未亡人羽織へ過夫を思ひ出し 季光

四疊半たゝむ羽織にひまがいり 栗
羽織着て遠縁と云う義理を立て 無人
小遣の慾しい面手に羽織着て 同
羽織着て手相見街の隅に生き 柳亭
すんてのこゝ羽織モンペになるころ 哲水
二次会の席へ羽織を忘れて來 十九平
二日酔羽織の行衛確かめる 鉄児
羽織から小遣ほしい手がのぞき 無人
(五)家元の家に生れた羽織きて 幸男
(五)身替に羽織を脱いで帰つて來 文蝶
(五)追羽根の加勢羽織を松に投げ 瓜平
(五)轉落の羽織の柄が派手になり 恒明
(五)情熱の炎に羽織すれてゆき 瓜平
(人)金策へ着せる羽織の裏け糸 三司
(地)絵羽織の肩へチューインガムの痕 小松園
(天)久々の羽絵へ紐が見当らず わたる
(軸)あると云ふと解れば脱ぐ羽織 梅里

席題「落し物」

清水白柳子選

今朝買つてやつた定期を落して來 正司
欠伸してフト思ひ出す落し物 三司
落し物どいた／＼の慌てよう 文蝶
落し物警羅に驚く抜はれ 同
落し物うっかり云へぬ手の感觸 無
落し物角の守衛に咎められ 三司
落し物しらから名前覚えられ 紅山
落し物にいらぬのやとどうもさき 一杉
落し物にする氣がつかず屋大胆に 木声
泥ろんに落ちてみぢめな落し物 鮎美
電柱にかけて帰つた片ちゃんば 胡蝶
落し物代り買つたら出て來たよ 三司
落し物秘書責任の襟に云ひ 晴峯
かかる世に落し物にも事かへて 塔仙
落し物で目振り返る五六人 水堂
ルンペンの日不景氣な落し物 紅山
見せられてから氣のついた落し物 喜久堂
捨てた反古落し物に注意され 幸男
大金をひろつて半日おじやんち 水堂
遊んで一生食える落し物 幸男
専務車掌にやつと笑ふ落し物 水堂
落し物踏み潰されてる特賣場 瓜平

下心見せず水切る石を投げ ぶじ鯛
下心興奮させてなるものか 司郎

川 下開支部句會(下開市)

十二月十五日 於 國弘牛休門居

石川 侃流報

課長來ず慰斗紙付けた酒が来る 失名
カルシウムです骨迄喰はされる 妻揚子
頰骨の張りが親父に似た頑固 ぼなみ
いくつも使果したのしのいろ 今生
やうく思叶うて飽のし かうたる
セコンドの合間々々を脈がぬふ のぼる
骨折つてブランを組む雨が降り 柳坊
くどくしい経過黙つて脈を取り 素人
慰斗だけが張るかへれたお歳暮 牛休門
めし粒の処置へ姑角をたて 同
物質に恵まれ過ぎて嫁かす後家 紫蓮
四十にあせりの見せる無一物 同
骨おとみするな出世はこゝからだ 同
ガド下明日は明日の風が吹き 同
骨抜にされて原案通過させ 柳慶
一物も無いに税務署何んと見る 同
父帰ることのみ何と怒しがらす 米三
大晦日やつと爪つむ暇が出来 九呂平
隣まで襦袢で脈をとりに行き 同
戦友の骨を屈けて愚痴もきき 良坊
善い人の血であつてほし子の輸血 同
お茶漬へめはし記事が箸を止め 藤市
物質の裏打ちがあるおとてなし 同

十一月十八日 於 牛休門宅

後始末したばつかりに疑はれ 柳坊
後始末女給かんざめ飲んで見る 柳慶
後始末ばたきもかるし退院日 茶人
面倒な始末が自炊やめにさせ 侃流
刺引券結局高いものになり 牛休門
商魂は三割掛けて二割引き 妻揚子
ままごとと刺引て賣る面白さ 良坊
割引のちやんと儲けはとつてあり ぼなみ

五割引それでもうけもある云ふ 柳坊
刺引もかけられもなく古暖簾 素人
父さんが叱られてゐるつまみ喰ひ 司樓
客膳へ子のつまみ喰ひあわてさせ 紫蓮
客みんな揃ふ間を待つつまみ喰ひ 牛休門
頼かむりびくのえのを見せたり ぼなみ

川 岡山支部句會(岡山市)

十一月二十三日 於 弘済会ハウス

藤本 満年報

楽しさが唄に出るハイキング 美婦適
寐る事が楽しい母のよく動き 久米女
珍客へ末つ子おどさせられる 同
珍客があつて子供は外へ出す 安兵衛
知事室の机へ記者は腰をかけ 十九平
無遠慮なアナウンサーは年をき 高良
ホルモンがほし四十の坂を越し 久米雄
試食した手前個煮少し買ひ 格一
佃煮屋醬油の高いことも言ひ 九坡
秋日和隣の裏も借りて干し 吉備平
看板を裏から見て二階借り 正一
十月二十一日 於 弘済会ハウス

駅前のおオン旅窓をそり立て 七面山
名物を買ひたしてやる駅の前茶々 忠美
駅前時計がいらぬ店ばかり 忠美

川 大牟田支部句會(大牟田市)

十二月 於 三榮福利係室

富田 一葉報

ビルの化粧片側だけは通られず 十時
未亡人だらうるさい厚化粧 泉
珍訴訟仲居きれいに塗つて 抱逸
特賞が一つ違ひでよそへ行き 一葉
パチンコで勝つたピースは氣朗よく 亀水
失業の励みパチンコ小一日 扇波

川 小郡支部句會(山口縣)

十一月一日 長野 井蛙報

そろばんを何度入せども足らぬ月 柳虹
割算になるとそろばん譲り合ひ 井蛙
電報に要る紋付を借りにやり 同
隣室はもう電報を打つ手筈 同
腹の子も弾いて牛の値が決まる 遊曳
電報の来たお隣りを取沙汰し 一幸
一字だけ誤字の電報みなあわて 枯泉
「アトフミ」を氣にして母の母が着き 恒生
拉声器電報ですと僕を呼び 和男
役得の今日も包を提げており 枯草
下端の役得一杯飲んだだけ 〇丸
役得は大臣も立つ被告席 恭子
役得のお附は大分いける口 一幸
役得で建つた家だと噂され 一路

川 西日本川柳大會

於 弓削小学校

福島 鉄兒報

大声のお客とお隣までが知り 大甲帽
越して来て隣に家相教へられ 天弓
お隣もしてゐるからする手内職 正一
隣からもぐさおまへんか聞かれ 白柳子

やんわりと叱り隣の子を掃し 星抱
お隣の習つてヒスに甘んじん 谷水
隣人の情身にしむ不仕合せ たれ子
間違つて隣の所に返事をし 紫童
歪をふせた隣にまた酌がれ 没食子
高い塀あつてお隣らしめず 三郎
鬼刑事とは思えない好い隣 一福
お月見へ隣の屋根が邪魔になり 花子
初産の妻へ隣の母も借り 民穂
お隣へ電話がついてからの世辞 靈兒
雨降りごらちも駄菓子屋をはじ 日満子
昨日来た隣の嫁をもうけなし 遊星
お隣に五球があつて買ひそびれ 三千子
ぼんやり云われお隣り金を貯め 風車
お隣でもらつた大がほえ返し 季贊
隣りまで来て魚屋が向きを変え 一貫
隣席にシヤンが居るので只たのし 貴美女
隣から垣をまたいでやつてくる 游子
お隣も買われましたと賣付け 弓削平
隣はご氣にして居れぬ生活向き 三葉
隣席へ来てライバルはすまして 芳道
隣から保険屋追われる様にくる 四案
劇場の隣で孤々の声を上げ 風來子
寄附帳で隣の意地がよくわかる 方大
隣からお焦げでないかを報せて来 水市
お隣のラジオで丁度聴きかげん 忠美
お隣の身元は子供が洗つてき 茶々

小兒科
内科
性病科
安岡醫院

安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁溪側
電話南⑩三二四六

どなられず隣の猫と知りながら 老 骨
出世また好いお隣とさようなら 薔 紅
隣だと聞いた山道二丁先 哲 秋
壁一重隣の内緒皆聞え 銀 糸
朝婦りしたで隣はもめにもめ 千代男
役得があるか隣の暮しよう 粗 粒
お隣はよいもの御馳走くれたり ちかし
隣室へ秘書を待たして 機 織
隣から秘密のもれた玉の興 吞 狂
映画より隣の女へ氣を取られ かほる
うらぶれて帯る故郷に隣あり 水 馬
仇敵の隣の猫を足げにし 湖 月
ヒステリー隣へ恥じる声を出し 久米女
隣まで来て居るらしい猿廻し 耕 雪
隣から貰へば諸も奪ひ合ひ 草 骨
紋付で行けば隣も改まり 笑 泉
昇給は課長の隣りへ席が出来 格 一
電氣屋が来たよと隣から使者 たどみ
夫婦げんかお隣でも余波を受け 麗 市
お隣の早寝ヘラジコ小さくし 満 年
お隣へ行く様な氣で羽田を出 十九平
貧乏な隣同志でうまが合ひ 黃 月
大猿の隣りを知らず聞き合せ 二 鬼
親の氣も知らず隣の子と遊び 北 嶺
侮つて居たお隣で金を借り 多々榮
お隣へ返す樹目を山に盛り 晴の助
お隣に聞える様に云ひきかせ 柿 平
お隣りに名士が住んで自慢にし 弓削平
お隣へ行つて帯るぬ胆のこと 久米雄
隣にもあるの市場へ買いに行き 竹 風
隣から煙突掃除促され 不 老
ゴミ箱のことで隣と反目し 路 郎
お隣りに見おろされてるに住み 同
お隣が音痴であつて助かつた 同

川 弓削支部句會(岡山縣)

十一月 福島 鉄兒報
要求スト一應型の如くにし 奇 童

予算要求部長は○を一つ添え びか一
要求を出せば社長の無表情 鳴 子
終電車ライバル隣へ来て座り 十九平
金と暇持つライバルに見くびられ 鉄 兒
ライバルの内証あの娘の事らしい 奇 童
ライバルは社長僕には若さあり 久米女
ライバルの歩き方まで氣にくわ 游 子
物憶う頃か鉄に鈴がつき びか一
大切な物とは知らず子の鉄 白 頭
散髪屋鉄を持つてから尋ね 弓削平
爪つんで又叱られる 裁 鉄 笑 泉
お喋りが過ぎて鉄をいれ過ぎる 同
小氣味よく布地を走る 裁 鉄 鉄 兒
アリバイを作る名物買ひ忘れ 同
吉備園子お伽話をして食わせ 弓削平
故事來歴云うて名物少しくれ 鉄 兒
名物の本家は町の隅にあり 弓削平

川 姫路支部句會(姫路市)

十一月二十三日 於夷 一笑居

新米新米我に縁なし二百円 一笑 鬼
人工雨電源地帯それで降り 一笑 水
人工雨雲のかげらも湧いて来ず 一笑 路
降るもよし降りぬでもよし人工雨 燕 子
趣味の選択するにおいしものはかり 一 笑
打診して見たが氣のない答なり 和 水
贈答に早くも予算狂ひ出し 燕 子
レツテルを見てグラスに注いで 燕 子

川 岡山縣廳支部句會(岡山市)

十一月十日 於世話課宿泊所

四五人は増える見込の酒を買い 大甲帽
金持ちと見込んでくれた夜の女 夢沙子
増収の見込みと活字大きくし 五 風
賣出しは万引されるのも見込み 大甲帽

億鬼もう僕の見込みを聞いていす びか一
税務署に見込みでゆくと脅かさね 九 坡
知事談を入れてニュースをでつら上げ 風來子
朝鮮のニュース株價をもてあそび びか一
井戸端のニュース夕餉の隣にのり 七面山
昇給のニュースがデマになつて消え 格 一
酔眼へ電光ニュース早すぎる 満 年
減税のニュースへあまり期待せず 吐 夢
ビッグニュースなどたわいのない話 鉄 兒
會計課から聞いてきたいニュース 大甲帽
特種へ腕の凄味を見せる記者 鉄 兒
敏腕が知れて警戒され始め びか一
鬼瓦片落ちたまゝ賣られ 鉄 兒
柱とも頼む旦那の今朝の記事 風 車
節のない柱を税吏見て帯り 忠 美
ごひきの目には見事な舞姿 中山子
ひいき客からの花輪で舞台埋め 十九平

九月十三日 於縣廳内世話寮

横着な犬でうす目を開けただけ 満 年
末つ子の横着姉をこき使ひ 十九平
微熱あるのに横着者と云はれ 茶 々
横着な妻に朝食パンとされ 夢沙子
二ツ三ツ逸話があつて消がつき 中山子
失敗というが逸話として残り 九 坡
金持の逸話案外けち臭し 格 一
將軍の逸話一喝した話 忠 美
又どうぞ惜しい所で鐘二つ みつる
税務署の人と妓に意をふくめ 大甲帽
母さんは中立ですと取り合わず 四 案

川 詫間支部句會(香川縣)

十二月十二日 於永康病院會議室
町重な見舞に熱が又昇り 綠 山

版写謄田阪

二五町田芝区北市阪大

会商田阪 株式會社

番一九九五島福話電
番四一一三六五

人間の分類と世態

長谷川成一先生著
著者は世俗を超越して眞に人間的に生きてゐる人。川柳では一徹と稱し「君などは惡貨の一流流行るべし」と金儲けにキユウくたる医師仲間を諷殺する人。その奇骨、その柳眼が凝つて、戰慄を余所にこの快著となつたもの。一読を薦む。 特價三圓 千八円
大坂市住吉區南代 不 朽 洞
西本丁目二五番地 振替口座 大阪 三〇三九九

見舞客遺言めいた事を聞き 見 子
お見舞の中にライバル交つてゐ 魚 善
お見舞の義理を果して来て泣かれ 風來子
忠実さんてみじんないアブレ 敏 子
忠実な夫サラリ一皆渡し 同
忠実へ税はますくのしかかり 満 年
十月二十日 於永康病院會議室
失恋の痛手写真を皆破り 敏 子
約束が破られそうな親父の目 魚 善
処女の夢破れ冷たい都会の灯 迷 窓
かくれんぼ破れ障子からのぞき 秋 宝
取り返す手紙は破る息づかひ 風來子

先づ刺身海辺の町の味を知り
比呂史
刺身なごあとでもよいと主人急き
一哲
刺身でも何んでも良いと社用族
彈正
刺身にも成れぬ魚がいばつてゐる
瑞枝郎
折角の刺身病人喰べられず
蓬路
血を見ると云ははかりの刺身なり
瑞川
お刺身はもう胃はないう女房ふて
無名林
おさしみのつまぐらにござすられ
上六

日時	二月二日(土)午後六時
会場	大宝文化会館 南区三休橋南詰東入
兼題	「へ」ク」三句 路郎選
	「交際費」三句 生々庵選
	「工場」三句 栗選
席題	選者 當日発表
柳話	麻生路郎
句評	水谷鮎美
呈賞	路郎選 天位(不朽洞賞)
	並ニ各題 天位
会費	五〇円

南無阿彌陀和尙は刺身好きと云う
拾舟
お刺身の厚きは竹の間いとお客
同
頭数揃へてさしみ薄いこと
生々庵
老妻にそつと刺身を分けてやる
瑠枝郎
刺身だけあればいゝさといへり口
路郎
何が不足か刺身に手をつけず
同
女形出を待つ間の巻煙草
迷路
政岡も内ぢやおまんまおいッだ
瑠枝郎
酒癖ものつて話題の女形
捨舟

女形より夫人の方が老けて見え	彈正
女形あれが男かなや	鳥耕
水谷は生み章太郎まだ生ます	無名林
女形おかるのまゝで大あぐら	生々庵
樂屋着も好みを見せて女形	同
遙引は女形も背廣琴なり	比呂史
雀右衛門あゝのこうご祖母米壽	捨舟
ほんきされてゐる通りする女形	同
妻の名は夫人とだけの柿妣庵	無名林
夫人同伊タシメイタシに同と呉れ中	同
若い時はこれでもエと老夫人	瑞川
頭から足まで夫人氣取りなり	同
貴夫人と云はれて妻もその氣なり	彈正
酒席にも侍べる夫人を嬲たがり	比呂史
衣すれに夫人と氣づく應接間	生々庵
そつてなく電話を切つた夫人なり	路郎
おしやべりの中にも夫人虚栄が出	同
十月	於安岡瑞枝郎居

十一月十八日於玉野市和田支所

中村ただみ報

感潛の今日へ苦勞の日をかされ 百文
稻刈りに羽張り切つて晝を知り 現代坊

稻刈りに娘は蟬を連れて来る 風來子
 稻刈りへバスの視線が通り過ぎ 源之助
 恋人の窓の下なる稻を刈り 風來子
 何依が余分のあらう稻を刈り 魚子
 ごぶろくを今年も這る稻を刈り 満年
 俳出もヤミもごつちな稻を刈り ただみ
 熟柿食ふ鳥は馬鹿に黒く見え 魚々
 僧正の手が鳴るたびに熟柿減り 秀峯
 パスからも一つ取れそに柿が熟れ 紅天
 遠足の列を熟柿が仰向かせ 大甲帽
 文化部に女性にリードされて居る 方大
 文化費は村の予算の隅にあり 満年
 押入れの疲れた文化へ疎く寝る 秋穂

鳥取含銀句會（鳥取市）

十月廿四日
於鳥取南支店
森本法皇子報

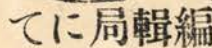
漫歩
眼が、に忘れてあるを追いかける
駅員の役得孝行京詣り
駅員の確かにスリと思えども
八方菜
法泉子

品質優良
タチカワペン先



タチカワピン
タチカワセム
タチカワ画鋏

大阪市東区豊後町四八
立川商事株式会社



翌三十日から病臥。例によつて疲れからの下痢狀に、一寸タバコを喫つて見たが、サツパリ咽がない。終日何も口にしないで睡眠をとつたが、充分に安眠が出来ない。大晦日も、僅にタバコ五六本ばかり喫つたきり。タバコが五六本喫えたので、慶し快方に向ひているのだと思ひながらラヂオの除夜の鐘をきいてゐた。こんな調子で新年えスベリ込んだ眠で、すまないと思ひながらも年賀狀を一枚も出さなかつた。そして五日の夜の新春句会まで寝正月をしつ。湯にも入らずヒゲは伸びたまゝであつた。しかし新春句会には何人としてでも出かければならぬので、寢床から這出て、出席したが、大室文化会館の三階で、澗を頼りに、休

山積した通信に没頭した。そして廿九日の夜は生々庵居で恒例の忘年会があり、私遣夫妻だけ交えた家族だけの忘年会だったので大いにユカイになり、帰途色紙を購めるためにくるまを下車、老妻がトイレットを要求するで、一寸遺寄したのがキツカケで二人きりの二次会になった。ムロシ多くは呑まなかつたが、新年夢も出て「と」と思つたのがいけなかつたらし

又床の中にぐつた。床の中では二月夢の仕事が待ちうけている始末なので、どうしてもスツキリしない。そこえあちこちの押毫がある。十三日には大交會館落

成川柳大会がある。これもことわる訳にもいかない。十四日は一層疲れている。その夜は一睡も出来ない。朝方トロ「と」としたと思うと、もう十一時である。今

て立ち戻つたことをこゝに、告白しておく。何れにしても水府君が健康なのと、大会が盛会であつたことは私の心いによろこびとするところである。

★以上は私の近況で、からの酷使も三十八度繰りくりまでも続けるつもりだ。それが私の性格であり、宿命でもあるのだと思つてゐる。

（路郎）

（路郎）

6階

着付から 美容
 舉式、寫眞、披露
 まて 一切承り
 ますので
 きわめてお便利
 てございます
 御依頼も一切取扱いでございます

荷貸衣裳も一切取揃えてございます

金曜定休
松坂屋
大阪日本橋

大阪日本橋

3時間
特急
大阪
名古屋
最短時間で結ぶ

毎日3往復

座席指定制
特急料金 ¥100
上本町發
7:40 12:40 16:40
名古屋發
8:00 13:00 17:00

Printed in Japan

課題吟募集

地下室（十句）橋本綠雨選
鄉愁（十句）山根白星選

留守（十句）清水白柳子選
靴べら（十句）村松夢裡選

每号募集

近作柳樽(雜詠廿句)麻生路郎選
川柳塔(雜詠)麻生路郎選
文章(評論・研究・感想其他)

投稿規定

▼「投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。」
▼「近作柳村」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」は何人でも投句が出来る。

「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。

川柳雜誌
第二十七卷

金四〇四

半々年概算
二六四四

昭和廿七年一月廿五日印刷

昭和十七年二月一日發行
大阪市住吉區内方代四丁目二五番地

麻生幸二郎

發行所
川柳雜誌社

盤口座 大阪 七五〇五〇